

仙台では今プロ、アマチュアを問わず、地元音楽家が積極的な演奏活動を展開、創作活動と合わせて、地域に根差した独自の文化を形成しつつある。しかし、こうした状況は一朝夕になったものではない。戦後の流れを振り返ってみると、多くの団体や個人が情熱を傾けてさまざまな試みを行い、時には挫折を繰り返しながら、現在の隆盛を支える基盤を築き上げてきたことに気付く。終戦直後の音楽活動の芽生えから、基盤が整い始めた五十年代初めまでの音楽界の歩みを、各時代を象徴するような団体、個人の活動に焦点を当てて再構成してみたい。(敬称略)

学生ら20人で誕生
昭和二十一年四月。戦災で焼け野原と化し、混乱から抜け切れない仙台の街に掲げられた「聖歌を歌う者よ来れ」の紙片は、若者たちの心を強くとらえた。呼び掛けの中心となったのは、東北大学院生で、尚綱女学校、仙台二中(旧制)の講師を務めていた鈴木一郎。拠点を構えた仙台北星教会(原良三牧師、現

仙台北三番丁教会)には、間もなく東北大東北学院、尚綱女学校の学生を中心に二十人ほどが顔を出すようになる。戦後、市民による合唱活動の草分けとなった「仙台ボランティアコーラス」は、こうして誕生し

1

戦後の歩み

(後に青山学院大助教授、津田塾大惠泉女子大教授、横浜市在住)という強力な指導者の存在、心の空洞を埋めるための何かを渴望する若者たちの合唱への意気込みが、飛躍の原動力となったことは、当時のメンバーが等しく口にすることだ。
「多くの団員がメサイアなど知らなかったし、十分な英語教育を受けられる状況にもなかった。しかし団員は、火の玉のようになっ

教会を拠点に 若者をつかむ

て、取り組んだ。日本に絶望していたから、何か美しい物を求める心情は、なおさら強かったのではないかと。鈴木は振り返る。

空腹、練習で紛らす

同合唱団のメンバーは、創立からわずか七カ月後には三倍増え、ヘンデルのオラトリオ「メサイア」の演奏会を開く

という、驚くほどの発展を遂げる。鈴木

仙台ボランティア

実現したもう一つの背景である。

第一回「メサイア」演奏会(抜粋)は、二十一年十一月二十三・二十四の両日、当時東北大学医学部学生だった今田拓(宮城県拓杏園園長)は団員の心情を次のように代弁する。
「朝から晩まで空腹で、何かに熱中して紛らすことを考えていた。娯楽と言えば、古い映画しかない時代で、合唱はこれ以上ない手段だった」
合唱団にとって、鈴木の存在は極めて大きかった。サンフランシスコ生まれの

が応援に駆け付けたものの、演奏したのは「序曲」と「田園シンフォニー」だけで、ピアノ伴奏で歌うという変則的な演奏会だった。一部の団員は着るものもなく、げた履きの上に、藤光子(現江崎、宝塚市在住)、勝又郁子(現元石、横浜市)、小野寺陽子(現大原、仙台市)、今田(斎藤信彦(産婦人科医、三鷹市)、遊佐幸章(元小学校長、八王子市)ら、メンバー五十七人が出演した。独唱はソプラノが

平和の訪れ実感

だが市民の印象は強烈だった。ある女性の聴衆は、メサイアを聴いて、初めて平和が訪れたことを実感、涙が止まらなかったと後日、団員に語ったという。翌年は「メサイア」全曲演奏が

鈴木は、戦前、戦中と、東京・三崎町教会で中田羽後(荻窪栄光教会名誉牧師、故人)が主宰していた「東京ボランティアコーラス」に所属。数多くの演奏会に出演していた。仙台で進駐軍の通訳を務めたこともあり、楽譜収集などの面で、進駐軍や中田らの援助を受けることになる。「メサイア」演奏会が

戦後、仙台での「メサイア」初演となった。仙台ボランティアコーラス第一回演奏会(21年11月、尚綱女学校講堂



終戦直後の若者の群像を象徴していたとも言えるこの合唱団は、結局時代の流れに取り残されていく運命にあったのだろうか。

「メモ」 仙台ボランティアコーラスによる主な演奏会はメサイア(昭和21年11月、22年12月、23年11月)とエリヤ(23年6月)と天地創造(25年7月)と合同メサイア(24年12月、26・31年12月)など。会場は宮城学院講堂、仙台市公会堂ほか。22年12月には、東京ボランティアコーラスと合同でメサイアを演奏(東京・日比谷公会堂)している。
現。二十三年六月には、メンデルスゾーンの「エリヤ」まで取り上げている。しかし鈴木は青山学院の講師に迎えられ、二十三年十月に離仙、同合唱団は大打撃を受けた。以後指揮は渡部和(NHK勤務、所沢市)、今田、石川泰久(KD勤務、藤沢市)、遠藤浩日(立リジット勤務、仙台市)らが引き継ぐ。二十五年七月のハイドン「天地創造」(高田信一指揮の東京フィルハーモニーが客演など、記念碑的な演奏会もあったが、年月を経るに従って徐々に活動は下火になっていく。二十四年から始めた、仙台市内の他の合唱団との合同「メサイア」演奏会には、三十一年まで出演したものの、練習にも人が集まらなくなり、翌三十二年三月、ついに解散に追い込まれてしまう。
前委員長として、事後処理に当たった遠藤秀樹(日産自動車勤務、豊橋市)は「若者にとって、合唱だけが楽しい時代ではなくなっていたし、世代交代が進み、完全に宗教的色彩が薄れてきた」ことを原因として挙げる。学生主体で、仙台にとどまる人が少ないという事情もこれに拍車を掛けた。

◇米軍の進駐始まる

戦後、仙台とその周辺への米軍の進駐が始まったのは、昭和二十年九月。先遣隊が到着してからわずか二週間余りのうちに、一万人を超える部隊が姿を現した。仙台では川内、苦竹、榴岡地区などが次々と接収され、米軍キャンプが生まれた。

進駐軍は、やがて文化面でも市民に刺激を与えるようになる。一つの象徴とも言えるのが、東北を統轄した第九軍団の、司令部付聖歌隊、後のキャンプ仙台聖歌隊の存在だった。

進駐軍と家族の礼拝のための聖歌隊であり、当初の活動が市民から遊離していたのは事実。だが聖歌隊の活動は数々のアンセム、合唱曲の紹介につながるなど、仙台の音楽界に重要な影響を及ぼすことになる。

キャンプ仙台聖歌隊を語るにはまず前身のNJCS(フリース・ジャパン・コーラル・ソサエティ、北日本合唱団)から始めなくてはならない。NJCSは、東北学院講師の黒沼幸四郎(佐賀大名督教授、東京・世田谷区在住)によって、終戦直後の二十年十一月ごろ、結成された。団員の中心は東北学院、宮城学院、

尚絅女学校の学生で、百人近く上ったこともある。黒沼自身「予想以上の団員が集まり、それほど歌に飢えていたのかと驚いた」と語るほどの数だ。東北学院礼拝堂を拠点に、幾つかの記念碑的な演奏会も開いて

った。黒沼と、NJCSの中で教師格だった宮城学院助手の菊地多美(現千田、宮城学院女子大教授、山田つや(元宮城学院女子大教授、故人)らが、団員を対象に簡単なオーディションを実施。オルガニストを含め、二十人のメンバーで聖歌隊がスタートした。

発足当時のメンバーは菊地、山田のほか、仙台市職員赤間宏一(テクノポリス宮城勤務、仙台市)、教師の

△2▽

戦後の歩み

いる(メモ参照)。

編成依頼舞い込む

黒沼の下に、進駐軍から

聖歌隊編成の

依頼が舞い込

んだのは二十

一年の春先だ

設けられた礼拝堂が、聖歌隊の活動の舞台となる。日曜午前十一時から礼拝サ

ービスは、東北各地の部隊にラジオ放送された。各地のキャンプを回っての演奏も行うようになる。毎週木曜の夜の練習と、礼拝当日には、送迎バスが市内を回った。軍人の妻たちは、練習日にも、手作りの食事を

持って駆け付けるなど、宗教を通しての、さまざまな交流が生まれた。

宗教通し交流

親善にひと役

岡崎澄三郎(元名取農高教諭、故人)、只野平四郎(元宮城教育大付属中教諭、仙台市)ほか、やがて連れて

きた。第九軍団は当初、仙台市北一番丁の仙台簡易保険支局(現仙台地方簡易保険局)に司令部を置いた。三階に

レベル向上を目指す

聖歌隊には、幾つかの転機があった。第九軍団司令

部は二十二年春、川内キャン(キャンプ仙台)に移り、聖歌隊の活動の場もキ

ャンプ内の礼拝堂となる。第九軍団司令部付聖歌隊から、

ア・ポーター(現在は米国在住)が後を引き継ぐ。東北大助教授の藤井康治(東北大名督教授、仙台市)、日銀仙台支店勤務の土井靖一(日本事務サービスマン勤務、東京・世田谷区)を加え、メンバーが三十人を超えたのもこのころである。

親善にひと役

た。

「全身全霊を傾けての指揮は、団員に強烈な印象を与え、その精神、表現力の深さに、多くのものを学んだ」と土井が語るように、聖歌隊は全盛期を迎えた。

昭和二十三年三月当時の第九軍団司令部付聖歌隊(後のキャンプ仙台聖歌隊)前列左から二人目がエレノア・ポーター(川内キャン

指揮者を辞任。宮城学院教授のエレノア

内の礼拝堂前

しかし、ポーターは二十三年九月、結婚による帰国が決まり辞任。土井が指揮者代行(後に指揮者として、

よく聖歌隊を支えたが、土井も二十五年六月、東京へ転勤となり、聖歌隊は再び大きな打撃を受ける。岡崎が後を引き継いだものの、勢いは年とともに衰えていった。

聖歌隊の規約は「音楽による養美と奉仕」奉仕による日米両国の理解の促進」をうたった。日本を正しく理解してもらおうと、音楽に情熱を傾けた隊員も多かったという。しかし

メモ

NJCSは、23年2月、黒沼の東北学院退任に伴い、自然消滅するが、黒沼の指揮で22年10月に、ベーターの「第九」第四楽章ピアノ伴奏を、同12月には、ヘンデルの「メサイア」を演奏している。「第九」のリストは武田敏子(仙台市、石川百合(現山崎、元大阪キリスト教大教授、堺

徐々に「日米親善を、高々と主張する時代ではなくなっていた」(藤井)。時の流れも隊員の心に、微妙な変化をもたらしたのだらう。

結局聖歌隊は三十二年、米軍の引き揚げを前に廃止された。旧隊員有志によってトリニティコワイヤという合唱団が作られたが、本格的な活動をせずに、消滅してしまっ

キャンプ仙台聖歌隊の歴史を振り返る時、忘れてはならないのは、二十四年十二月十八日、宮城学院講堂で開かれた「第一回合同メサイア」演奏会への出演である。藤井の提案で実現したこの演奏会には、ほかに仙台ボランティアコワイヤと仙台放送合唱団が出演した。同聖歌隊が、初めて市民の前に姿を現した演奏会でもある。以後廃止直前の三十一日まで、聖歌隊は合同メサイアの柱の一つとなった。この時生まれた、団体間の協調の気運は、その後形を変えながら、引き継がれていくのである。



(敬称略)

東北の民謡は好評

戦時中著しい制約を受けたラジオの音楽放送は、終戦によって自由を取り戻す。手探りの状況の中、新しい方向を見いだそうとしていた。放送を禁止されていた米英音楽をはじめ「時局がらふさわしくない」として切り捨てられた純芸術的な曲、叙情的な歌、軽音楽などが、次々とスピーカーから流れるようになった。

この時代、NHKは地方文化の育成にかなりの力を割いた。各地の中央放送局は専属の管弦楽団、合唱団を抱え、自主制作の音楽番組を放送していた。仙台中央放送局(現仙台放送局)内に置かれた仙台放送合唱団は、音楽放送を通して、当時最も市民に親しまれた合唱団でもあった。

同、仙台放送管弦楽団の佐々金治(指揮者、東京都文京区)、東北大副手の花輪一郎(元NHK職員、相模原市)らがついた。東北大助教授の藤井康治(東北大名管教授、仙台市)、同管弦楽団の鈴木一郎(東北音楽学校

3

戦後の歩み

ラー番組があったほか、午後の「食後の音楽」(音楽の時間)、各中央放送局持ち回りの「音楽便り」(全国放送)などに時々出演した。各国の民謡や、ポピュラー音楽、クラシックの名曲など親しみやすい曲が多く、ほとんどを福井が合唱用に編曲した。仙台中央放送局嘱託の武田忠一郎(民謡研究者、故人)採譜による東北民謡は特に放送の頻度が高く、好評だった。

演奏は、しばしば要求され、楽譜や紙も容易に手に入らない時代ではない。佐々や神波、藤井らがガリ版を切り、NHKの局内文書の裏面に印刷した。

困難ばかりの時代、合唱団が着実に実績を重ねた青景に、福井の強力な統率力があつたことは、だれもが指摘する。

「編曲も素晴らしいし、上機嫌でにぎやかな指揮ぶりが強く印象に残って

ただでなく、視覚的にも親しんでもらおうという趣旨だった。福井は、市民の中に溶け込むことを非常に大切に考えていた(藤井)。

「権者が種まく」(トビジョウ)と「フオスターのメドレー」など、親しみやすい曲ばかり集めた演奏会は大成功。この時、戦後初めて生の音楽に触れた人も多かった。団員にとっては、衣装をそろえるのも一苦労で、女性の多くは、

突然穴埋めに 初見の演奏も

◇
当時、すべて生中継

「突然穴埋め」は、昭和二十二年六月二十二日、合唱団にとって、忘れ

た。鈴木は振り返る。初見

◇
「突然穴埋め」は、昭和二十二年六月二十二日、合唱団にとって、忘れ

た。鈴木は振り返る。初見

た。鈴木は振り返る。初見

◇
「突然穴埋め」は、昭和二十二年六月二十二日、合唱団にとって、忘れ

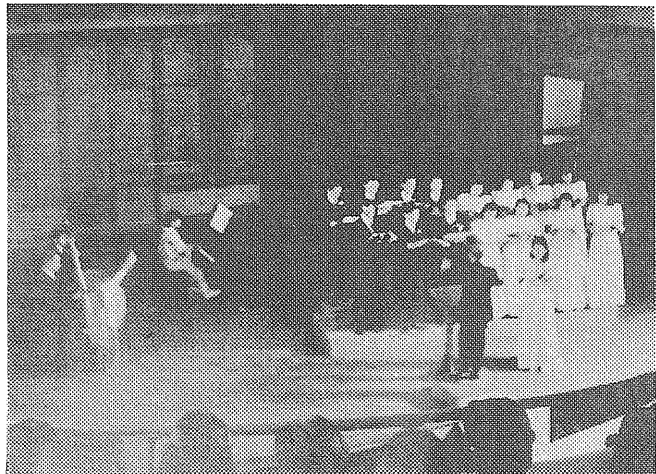
た。鈴木は振り返る。初見

た。鈴木は振り返る。初見

仙台放送合唱団

「ラジオを

井、ピアノは建部順子、22



能祭や、NHK関係行事のほか、角田中学(旧制)の校歌披露演奏会、喜多方商業の福島県管移管記念音楽会などに出演。仙台市の聖和学園、鉄道教習所、荒町小ほかでも演奏した。後の仙台市内合唱団による「メソッド」合同演奏会でも重要な役割を果たす。

楽しい歌を歌おう

「焼け野原となった仙台に、昔の緑をよみがえらせるような、若々しいハーモニーを響かせたい」。昭和二十三年二月一日、合唱の魅力にとりつかれ、少しでも多くの人々に、その喜びを分かちたいと願う若者たちによって、一つの合唱団が結成された。杜の都、希望に輝く若者たちの心を象徴するかのように、グリーン・ウッド・ハーモニーと名付けられた合唱団は、急速に枝葉を広げ、さわやかなイメージとともに市民に迎えられていく。

結成の中心的な役割を果たしたのは、東北学院の学生で、N.J.C.S. (北日本合唱団) のメンバーでもあった遊佐幸章 (元小学校長、国立市在住)、笹気幸四郎 (元出版印刷業、仙台市)、鈴木和夫 (現山田、弥満和電機社長、宮城県亶理町)、藤田武夫 (故人) の四人。遊佐は仙台ボランティアコアワイヤのメンバーとしても活動していた。

「当時の合唱団は宗教曲一辺倒。だれでも親しめる歌までレパートリーを広げ、自分たちも楽しみ、市民の皆さんにも聴いてもらいたいと思った。遊佐は結成のころの気持ちをこう語る。発会式は、仙台市支倉の長谷柳繁学校 (現長谷柳繁

専門学校で行われた。参加したのは、ほかに東北大医学部学生の鈴木二郎、東北大名誉教授、(仙台市) 斎藤文雄 (東邦大名誉教授、東京都豊飾区) 約二十人。遊佐の指揮で、ウインナワルツやポピュラー音楽など次々と演奏した。練習会場となった同校は、常に歌と

＜4＞

戦後の歩み

笑いに満ちていたという。コンクール目標にしようとするところN.J.C.S.が解散。旧団員の一部がグリーン・ウッド・ハーモニーに参加したこともあって、団員数は一日と増加

する。同年八月、一層の音楽的な高みを目指そうと、宮城師範学校教員の浦崎永著 (元小学校長、故人) を指揮者に迎えた。

翌二十四年秋、浦崎の勧めで参加した全日本合唱コンクール東北大会で二位に入賞、全国大会でも四位に入る。これを契機に、コンクールは合唱団の重要な目標となる。浦崎の東京転出に伴い、二十五年八月、作曲家の福井文彦を正指揮者に迎えてからも、この傾

城市、石田信二 (仙台市立病院技師長、仙台市) を加えた「集団指導体制」による初の演奏会だった。団員は、佐々の指揮による「オーレ」の「レイエム」を涙して歌ったという。演奏も素晴らしいに違いないが、さまざまな理由で、万感込み上げるころがあったのだらう。

一時は崩壊の危機 合唱団は三十年の冬、崩壊の危機にひんした。東

り返る。危機を乗り越えるために考え出したのが、練習法の集団研究などを柱とする、この体制だった。

「みなドンクリだったが、それぞれが得意の分野を徹底して研究、指導すること、必ず団全体の向上を図れる」と、確信していた「伊達」。

小林が相次いで東京に去り、集団指導体制は手薄に。三十八年、東北学院大クリークラブを率いて活躍していた海鋒博美 (徳陽相互銀行勤務、仙台市) を指揮者

ラジオに出演 身近な存在に

向は続いた。福井は当時東北合唱連頭の理事長。仙台放送合唱団専任指揮者を辞めてから一年余りたっていた。

福井は合唱団の一つの黄金時代を築く。コンクールでは六年連続東北大会二位に甘んじ、全国大会には出場できなかったものの、レパートリーは飛躍的に増大。遊佐が「あれほど豊か

近な存在となっていた。北での優勝は確実といわれた同年のコンクールでも、二位に終わったことから、内部の結束が乱れ、五、六人しか、練習に顔を見せなくなかった。

「解散の話もあった。どうすれば団員を呼び戻せるか、お好み焼き屋で議論ばかりしていた」と伊達は振

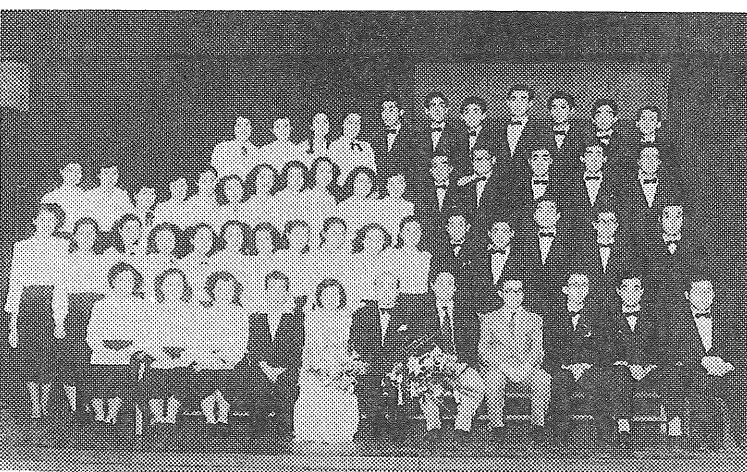
メモ グリーン・ウッド・ハーモニーの節目に当たる主な演奏会のプログラムは次の通り

「フォーレ」ほか▽東京公演 (41年11月) ▽組曲「威王」(佐藤真) ▽レイエム (フオーレ) ▽「サンヤンアルパム」ほか。指揮は海鋒、桜井幸雄▽創立20周年記念演奏会 (43年1月、宮城県民会館) ▽「蔵王に寄す」(結婚進行曲) (福井文彦) ほか、指揮は福井ほか。在仙台合唱団が賛助出演。

に招き、新たな時代を迎えた。四十一年十一月には、東京公演 (東京文化会館) も成功させている。以後四十三年二月に、作曲家の岡崎光治 (仙台市) が指揮者に就任したものの、渡米のため三カ月で辞任。仙台一高教諭の中野貢治 (現石坂、種苗店経営、長岡市) が後を引き継ぐ。中野は岡崎や、今井邦男 (尚絅女学院短大助教) ら、在仙の作曲家の作品演奏に力を入れ、新風を吹き込むが、こうした姿勢に古くからの団員の多くは反発した。



事、同) の団員四人。今野善夫 (多賀城) 中教頭、多賀講堂



「真のアマチュアイズムとは何か」コンクールをどう位置付けるべきか。四十六年六月、伊達、今野らを中心とするグループは団を離れ、仙台グリーン・ウッド・ハーモニー混声合唱団を結成することになる。この分裂は、仙台の音楽界に強い衝撃を与えたが、過渡期にあった合唱運動を象徴する出来事でもあった。(敬称略)

情熱あふれる7人

昭和二十四年七月、仙台市の中心部を流れる広瀬川のほとりで、七人の若者が新しい合唱団結成に向けて構想を練っていた。練習会場も、指揮者もなく、メンバー確保の見通しなど全く立たない。しかし条件の悪さなど問題にしない、情熱であふれていた。

指揮的立場にあったのは、旧制二高三年の津田茂(現ラソ才福島役員、福島市在住)、矢野南巳男(国立山形病院院長、山形市)や、一学年後輩で学制改革に伴い、東北大一年となった仁科博之(仙台二高校長、仙台市)である。仙台では当時既に、仙台ボランティヤコワイヤや、グリーン・ウッド・ハーモニーなどの一般合唱団が活動始めていた。いずれとも異なる、自分たちならではの合唱団を作ることが、若者たちの夢だった。

「たしとえヨチヨチ歩きでも、先輩の合唱団にはないカラーを出したかった」(津田)、「純粋な合唱研究団体として、アカデミックな方向を目指そうと思った」(仁科)。同年九月、仙台市木町通小の講堂を練習会場に借りられることが決まり、本格的に団員を募集。十月八日、約三十人での練習にこぎつける。その年のクリスマススイアに「ローゼン・

シュタット・コール」と命名された合唱団は、こうして産声を上げた。

メンバーの主力は旧制二高、東北大、常盤木学園高、宮城一女高の学生。指揮は津田と仁科が交代で行ったが、正式な指揮者の招へいは同合唱団の最大の懸案だ

5

戦後の歩み

た。

「引き受ける気持ちには全くなかったが、純情な学生の頼みなので、一度聴く約束をした。ところが聴いてみると、初歩だが実に素直な声を出している。ぜひ指揮をしてみたいと思った。土井は就任までのいきさつをこう説明する。

27年に初の演奏会

土井によって、ハーモニーに磨きかけられ、合唱団の基礎は次第に固まっていた。

指揮者を務めている。

岡崎のときに、仙台市内合唱団の合同「メサイア」演奏会に初めて参加。猪狩の時代、二十七年秋には仙台市医師会館で初の演奏会を開いた。聴衆より出演者のほうが多いような会だった。猪狩は合唱団にピクトリアなど、ルネサンスの合唱曲を紹介したことで

も功績を残した。熊田が多忙のため辞任した後、二十九年からは団員で宮城県職員松岡信夫

勤務、郡山市)は、涌谷高

教諭となっていた仁科を訪ね、指揮者就任を要請した。

今は演奏活動休止

「過渡期にあった合唱団を維持するには、優れた指導力と音楽性をもった指揮者を中心にとまるほかない。仁科のセンスに頼るしかない」と判断したと、松岸は振り返る。

意気に感じた仁科がこれを承諾。同合唱団は新しい歴史に向かって歩き始めた。第一歩が三十三年十一

若者が独特の合唱団を結成

土井が翌三十五年六月、東京へ転勤となった後は、やはりキャンパ仙台聖歌隊の岡崎澄三郎(元宮城農高教諭、故人)、東北大生の佐藤典彦(日本水路協会常務理事、千葉市、常盤木学園教諭の猪狩良雄(音楽教室主宰、豊橋市)、仙台放送管弦楽団・同合唱団指揮者の熊田為宏(元山形大教授、仙台市)がほぼ一年間隔で

(宮城県下水道公社常務理事、仙台市)、東北大生の五十嵐康(富沢中教諭、同)が指揮者となった。だが当初からの団員が就職や、結婚のため次々と退団した時期に当たり、合唱団は徐々に先細っていった。解散さえ、ささやかれたほどだった。

三十一年五月、当時の委員長松岸孝吉(仙台国税局

ローゼン・シュタット・コール第2回演奏会から、オペラ「真間の手古奈」のステージ。昭和33年11月12日、仙台市公会堂

メモ

ローゼン・シュタット・コールの前身と言えるのが、旧制二高の音楽同好会。昭和二十二年、常盤木学園音楽部から混声合唱を試みたことでの申し入れを受け、同

「立て直しのためには、演奏会が必要だった。だが団員に力の差があり、合唱

で全ステップを賄うのは不可能。力のある人を活用しようと考えたのがオペラだった」と仁科は語る。

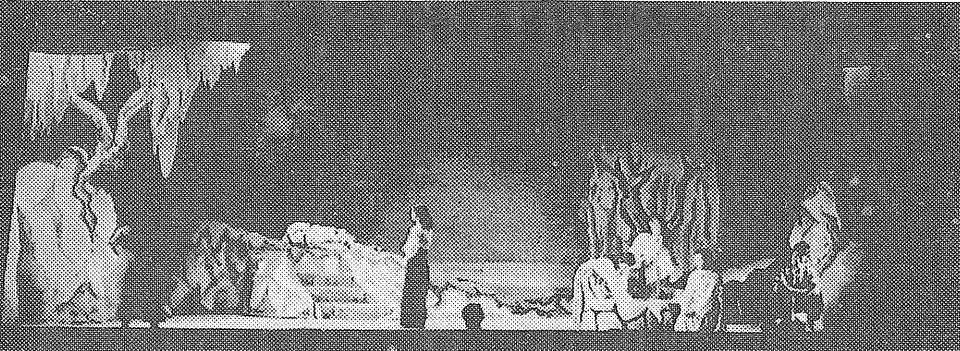
声楽家の西内ミエ(現姓・佐藤)宮城学院女子大講師、(仙台市)を迎えた以外、はすべて団員が出演。ピアノ伴奏の原曲を仁科がオーケストラ用に編曲し、東北大学交響楽団の有志と、ピアノの大泉勉(宮城教育大教授、同)が演奏した。大泉はこれがきっかけで、同合唱団の伴奏を務めるよう

学園で週一回の練習を重ねてきた。試みは二十四年の学制改革を前に解消されたが、これを惜しんだ両校の有志が同年初め「エバー・グリーン・コーラス」という一般合唱団を結成。同学

「完全に息を吹き返した。以後仁科の指導の下、着実に力をつけ、ほぼ毎年続く演奏会で、同合唱団ならではの特色あるプログラムを組むようになる。

三十八年のジョスカン・デ・プレの「五声部のミゼレ」に始まり、ビバルディ「グロリア」、パレストリーナ「教皇マルチエリスのミサ」、ラッスス「七つの懺悔の詩篇」と続くルネサンス、バロックの合唱曲の紹介が、中でも注目を集めた。東北大学交響楽団の協力でフォーレ「レクイエム」(三十六年、モーツァルト「戴冠ミサ」(四十四年)も演奏。佐藤真の「眠れぬ幼き魂」など、邦人の新作も積極的に取り上げた。

同合唱団は四十八年の演奏会を最後に、演奏活動を休止、自ら合唱を楽しむだけの団体に変身していく。しかし徹底した主張をもった活動、プログラム編成は、他の団体にも大きな影響を与えたのである。



「敬称略」

◇……◇ 基礎から作り直す

これまで戦後早い時期に誕生した合唱団を幾つか紹介してきたが、もう一つ忘れてならないのが職場合唱団の活動である。全日本合唱コンクール全国大会で度々上位に入賞、全国的にも名前を知られた仙台地方簡易保険局合唱団(仙台簡保合唱団)をはじめ宮城県庁合唱団、仙鉄合唱団などが、それぞれの特色を生かした、独自の活動を展開した。

職場を舞台とした活動は、練習会場の確保や、団員の招集などの面でメリットがある一方で、労働環境の変化や社会情勢に左右されやすいという弱点も抱える。ほとんどの団体は三十年代に入るところから、徐々に勢いを失っていった。職場合唱団は確かに一つの時代の象徴だったと言える。また人材を一般合唱団に送り出すなど、合唱活動に与えた影響も小さくなかった。

郵政省仙台簡易保険支局(二十四年六月から仙台地方簡易保険局)に混声合唱団が生まれたのは昭和二十三年八月だった。同支局が仙台市北一番丁に開局したのは昭和十一年。現在も残る鉄筋コンクリート四層建ての庁舎は、当時東北随一の大ビルディングとして知ら

れたが、二十年九月、米軍の進駐に伴い接収されていた。合唱団創立のころは、同市小田原案内にバラック建て仮庁舎があった。

同支局には開局間もないころから、女子、男子の各合唱団が存在。それぞれ十人に満たない規模だった

〈6〉

唱団の中心となった。二十四年十月には宮城師範学校教授の佐藤益喜(故人)の指導、棟方の指揮で、全日本合唱コンクール東北大会職場の部に優勝、翌十一月の全国大会でも四位に入賞した。この東北大会優勝の賞品の代わりに、当時東北合唱連盟理事長だった福井文彦(後に東北大、宮城教育大教授、故人)が一年間の無償指導を約束したことが、同合唱団のその後の方針を決めた。福井はいな

常葉音楽の世 戦後の歩み

賞品代わりに 一年無償指導

後七年間にわたって指揮者を務めることになり、合唱団は飛躍的に発展していくのである。

福井は団員の声域を調べ、パートを組み合わせ、合唱団を基礎から作り直した。

練習中は一瞬も目を離さなかつた。先生はうまうまかかないと、指揮棒をほうり出して帰ってしまう。再開してくれるように何度もお願いに行った。メキメキ良くなっていくのを、だれもが肌で感じていたのだ。どんなに怒られても、とにかく先生の指揮を歌いたくして仕方なかった。大森は当時を振り返る。

福井は折つてもいいように、常に三本の指揮棒を持つていたが、それでも足りないほど、熱意を込めていた。

二十六年ごろは団員が五十人程度まで膨れ上がった。最も盛んな時期だった。二十九年から三十年に

が、十九年ごろまで、慰問演奏などを行っていた。当時活動した棟方軍蔵(故人)、大森とめ、現上野、横浜市在住、瀬戸義春(仙台市)や、戦後入局した大村一(故人)、八巻駒夫(日本電子総合サービス仙台事業所長、仙台市)らが、新台

仙台簡保合唱団

なかなかに許可がもらえず「行く前と帰った後、留守中の仕事を消化する」という、全員連名の誓約書を局長あてに提出して、やっと出発した(八巻 ほどどつた。だが、宿泊に各地の地方簡易保険局を利用できた点では恵まれていた。宿泊の都度、お礼の演奏会を開いた。

二十六年ごろは団員が五十人程度まで膨れ上がった。最も盛んな時期だった。二十九年から三十年に



昭和27年11月、全日本合唱コンクール全国大会(大阪市中央公会堂)に出場した時の仙台地方簡易保険局合唱団。指揮は福井文彦

の指揮、石田信二(仙台市立病院技師長、仙台市)の指揮の下、全盛期を迎えた宮城県庁合唱団は、コンクールにしばしば出場し、県主催の行事でも活躍した。三十年代半ばには、完全に勢いをなくした。

宮城県庁合唱団の場合「当時、歌声運動が盛んになったこともあり、合唱団に組合の活動家が入ってきた。レパートリーにロシア民謡や労働歌が増え、これを嫌った団員が離れていった(石田)という背景もあったようだ。

だが「娯楽が何もなく、時代が去り、職場でまとまらなくても、個人でいろいろな楽しみを選択できる時代になった」ところで、職場合唱団の廃れた背景だと指摘する関係者が多い。こうした中、本音に合唱を愛する人たちは職場を離れ、一般合唱団へと活動の場を変えていったのである。(敬称略)

での新規採用がなくなったため、団員確保が困難に。翌年秋、福井が指揮者を辞めた後、コンクールの東北大会などを指揮していた八巻が引き継ぎ、メンバーが規定の三十人に届かず、三十二年からはコンクール出場を断念した。その後も四十二年ごろまでは放送を中心に活動したが、やがて小さな趣味のサークルに変わっていった。

三十年代は、同合唱団と相前後して誕生した仙鉄合唱団、宮城県庁合唱団などが、次々と消滅していった時期である。仙鉄(仙台鉄道管理局)合唱団は福井の指揮で、純粹に楽しむための合唱を目指し、職場内コンクールや、国鉄主催の各種行事に出場。宮城一女高教師で、福井の後を受けて東北合唱連盟、宮城県合唱連盟の理事長を務めた建部有典(後に山形大教授、故人)の指揮、石田信二(仙台市立病院技師長、仙台市)の指揮の下、全盛期を迎えた宮城県庁合唱団は、コンクールにしばしば出場し、県主催の行事でも活躍した。三十年代半ばには、完全に勢いをなくした。

宮城県庁合唱団の場合「当時、歌声運動が盛んになったこともあり、合唱団に組合の活動家が入ってきた。レパートリーにロシア民謡や労働歌が増え、これを嫌った団員が離れていった(石田)という背景もあったようだ。

だが「娯楽が何もなく、時代が去り、職場でまとまらなくても、個人でいろいろな楽しみを選択できる時代になった」ところで、職場合唱団の廃れた背景だと指摘する関係者が多い。こうした中、本音に合唱を愛する人たちは職場を離れ、一般合唱団へと活動の場を変えていったのである。(敬称略)

メモ

職場合唱団の活動状況を全日本合唱コンクールの宮城県予選(宮城県合唱コンクール)の結果から紹介する。二十八年(二十八年)は富士電機コーラス部(指揮・加賀みどり)が一位になり、翌三十九年には仙台簡保が一位に返り咲くが、これを最後に職場合唱団のコンクール参加はなくなる。

三十年が二位、二十六、二十八年が三位。仙台郵政合唱団(指揮・今野克)は二十八、二十九年二位を獲得している。三十八年には富士電機コーラス部(指揮・加賀みどり)が一位になり、翌三十九年には仙台簡保が一位に返り咲くが、これを最後に職場合唱団のコンクール参加はなくなる。

◆……◆
器楽部として創立

今回からは何度かにわたって、オーケストラの活動に焦点を当ててみたい。戦前から仙台での交響楽運動の中心的な役割を果たし、戦後いち早く活動を再開した東北大学交響楽団を初めに紹介しよう。

同交響楽団は、大正十年、東北帝国大学音楽部内の器楽部として創立された。翌十一年には近衛秀麿を招き、モーツァルトの「交響曲第三十八番」の本邦初演を行っている。定期演奏会は同十五年十二月に始まり、昭和十八年十一月の第二十八回(学徒出陣壮行大演奏会)まで続いたが、戦局の悪化に伴い中断していった。

戦後の活動再開のきっかけとなったのは、昭和二十一年早春、片平十大学北門わきの掲示板に張り出された一枚のポスターである。「同志よ、来れ」の文字を書き込んだのは工学部学生の曾我敷(ボイラ・クレリー)安全協会勤務、横浜市在住、片倉英雄(元東北電力勤務、故人)、福田良(BMF技術センター役員、千葉市)。「平和の訪れを実感するにつれ、若者は文化への渴望を抑え切れなくなっていた。呼び掛けは必ず応じてくれると確信して」

たという曾我の言葉通り、十人を超える学生が集まった。

福田は戦時中、OBが自宅に保管していた団の楽器集めに奔走。楽器の整備に伴い、団員数も徐々に増

演奏会会場は工学部講堂を開き、モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、ボロディン「中央アジアの草原にて」を取り上げた。団員有志が、仙台ボランティアコワイヤの「メサイア」演奏会の応援に駆けつけたのは、この直後である。

指揮者金子氏招く
翌二十二年は本格的な演奏活動再開の年となった。

戦後音楽界の歩み

「第九」東北初演 最高峰に挑戦

まず六月、戦前から同交響楽団とゆかりの深かった指揮者の金子登(元東京芸大教授、故人)を招きベートーベンの「交響曲第一番」と「ピアノ協奏曲第一番」を演奏。独奏は理学部講師の藤田尚明(後に助教、故人)が務めた。十一月には、定期演奏会(第二十九回)が復活。昭和十六年か

こうした情熱は、同交響楽団の歴史に、また仙台の音楽界にとって特筆すべき出来事となった昭和二十四年十一月のベートーベン「第九」東北初演(第三十三回定期)へと結び付いていく。「第九」演奏は当時

北大中央講堂を埋め尽くした聴衆に新鮮な衝撃を与えた。独唱者は仙台放送合唱団の丸芳多恵子(元金沢女子大助教、金沢市)、斎藤克子(ピアノ)教師、横浜市)同管弦楽団の現岡和蔵(現・幹博、バイオリン教師、仙台市)と東北大学教授松平正寿(町田市)東北大学合唱団、在仙合唱団連合など三百人がステータスに上った演奏会は、全市の催しにも言えた。これを契機に、同交響楽団は技術的にも飛躍的に向上していくのである。

が久しぶりに指揮台に上った。「交響曲全曲を、指定の速度で演奏することなど、とてもできなかった。速いパッセージを弾けない団員には、音を出さないように指示して、何とか体裁を繕った」と白根が語るように、演奏水準はいま一つだったようだが、学生たちの心意気は、敗戦のショックから抜け切れない市民に、計り知れない希望を与えた。

ちは、抑えることはできなかった。コンサートマスターとして、計画を推し進めた板谷英紀(バイオリン)教室主宰、盛岡市は、こう振り返る。
熱意に打たれた白根はこれを了承。まず第三十二回定期で、自らの指揮で第一楽章だけ取り上げた。金子を迎えよの全曲演奏までには「バイオリンなどはほぼ全員が暗譜していた」(白根)ほど練習を重ね、会場の東

る。
節目を迎え新機軸
二十年代から、三十年代初めにかけては常任の白根を中心に藤田(後に小川卓郎(外科医、角田市)が指揮者として活躍、第九初演の合唱指導も行った仙台放送管弦楽団、同合唱団指揮者の熊田為宏(元山形大学教授、仙台市)が外部から支援した。しかし藤田は三十二年に三十六歳で急逝、三十二年には白根が多忙のため指揮者を退き、オーケストラは大きな転換期を迎える。三十三年六月、定期が五十回の節目を迎えたことも身内でもやっている、委

昭和三十年
代、四十年代に定期演奏会に登場した指揮者は、ほかに久山恵子、若杉弘、マンフレッド・グーリッド、奥田道昭、浜田徳昭、熊田為宏、白柳昇二、上田仁、山田和男(現・一雄)、遠藤雅吉、鈴木清三、伴野雄、尾高忠明、ペーター・シュヴァルツ。独奏者としてはこの間、宮城徳雄(フルート)教師、仙台市)鈴木磨郎(東北大抗酸菌病

研究所教授、同、高宮敬ら同交響楽団団員、団友をはじめ磯恒男、山根弥生子、広瀬悦子、鈴木清三、坪田昭三、野島隆、海鋒正毅、外山滋、井内澄子、レイヌ・フランシエらが出演している。オーボエ奏者の鈴木清三(新日本フィル楽団長、桐朋学園大学教授)は、三十六年、オーボエパートに客演以来、管楽器の団外指導者として技術向上に重要な役割を果たすことになる。

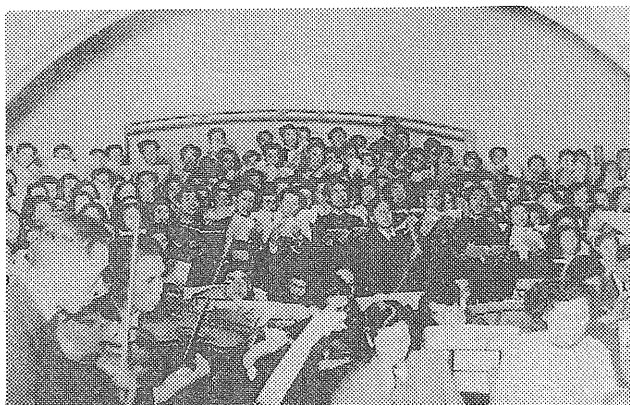
えていった。同年六月には、メンバーのうち八人が、東北大演劇部の「アルトハイデルベルク」(マイヤフェルスター)作)公演の音楽を担当。十一月には同大金属材

料研究所事務
嘱託の高橋義
吉の指揮で、
戦後初めての

東北大学交響楽団

「無謀だ」という人は多かつたし、今にして思うと確かに向こう見ずだったかもしれない。だが音楽の最高峰に挑戦したいという気持

東北での「第九」初演となった第33回定期演奏会一昭和24年11月20日、東北大学中央講堂



この時楽がた。指揮者として優れた才能を持ったOBの高宮誠(国立循環器病センター勤務、豊中市)が常任指揮者を務めた時期もあったが、第五十回定期の精神は、その後も長く引き継がれていくのである。(敬称略)

◇月平均20回も出演

NHKラジオのローカル放送は、終戦によって活気を取り戻した。中央偏重を避け、地方独自の文化の育成を図ろうという基本方針は、番組の制作、編成に大きな変化をもたらしている。この時期の仙台放送合唱団の活動については既に述べたが、音楽番組はもちろん、放送劇の効果音楽なども含めて、幅広い活動を行ったのが、やはりNHK仙台中央放送局(現仙台放送局)内に設置された仙台放送音楽隊である。二十年代から、三十年代初めにかけてのラジオの黄金時代を支えるとともに、唯一のプロの団体として、演奏活動、アマチュアオーケストラ活動の支援を行うなど、仙台の音楽界に重要な足跡を残していく。

同管弦楽団の歴史は、昭和十八年までさかのぼる。ローカル放送は制約を受けていたとはいえ、番組制作上最低限の演奏家を抱えておく必要があった。戦局の悪化に伴いその確保が困難になり、専属楽団結成の機運が急速に高まった。東北大学交響楽団の指揮などで、仙台にゆかりのあった金子登(元東京芸大教授、故人)を創立委員に迎え、バイオリンの天江安三郎(故人)を中心とした八人程度のアンサンブルが誕生し

たのは同年十一月である。戦後同管弦楽団の中心メンバーとして活躍する三浦二郎(バイオリン教師、仙台市)らも、一時在籍した。メンバーは応召などで激しく入れ替わる。十九年から終戦直後にかけては、仙台に疎開していた中央楽壇員は十五人程度となる。翌二十二年、仙台市出身の作曲家佐藤長助(故人)を初代の専任指揮者に迎え、新体制が整った。当時のメンバーは、戦前から活動していた菅野権七(仙台市)をはじめ、桜井茂フルート教師、塩釜市、伊藤正(打楽器、クラリネット教師、仙台市)、鈴木八郎(東北音楽学校理事、同)らである。同管弦楽団は、単独でのクラシック音楽の演奏はもとより、合唱、児童合唱の伴奏、民謡、歌謡曲、ポピュラー音楽、放送劇と、さまざま

戦後の歩み

戦後の歩み

まなジャンルで活躍。放送への出演回数は二十三年には、月平均二十回を超えるようになった。しかも専属の厳しさで、管楽器奏者がバイオリンや、打楽器まで演奏するなど、一人何役もこなすことを要求された。厳しい日程の中、団員が特に熱意を注いだのは、月に一、二度放送された「仙

管の時間」(二十二年開始)である。「仙管の評価の場なので、みんな緊張して取り組んだ。生放送で失敗は許されない。普通は本番当日だけの練習なのに、何週間か前から無理をしても時間を作り、五、六回は練習した。桜井は語る。同番組では東北大学交響楽団員を中心としたエキストラを加え、三十人程度の編成で演奏した。

「七夕同様、年に一度の逢瀬(おうせ)を、団員たれもが楽しみにしていた」と熊田という。仙札合同は二十七年三月と六月、それぞれ札幌、仙台で行われたのを皮切りに、翌年から三十八年まで毎年、両都市交互に開催された。両楽団とも一管編成だが、台同でエキストラを加えれば、大規模な曲に取り組める。団員にとって、選曲上の欲求不満を解消する、貴重な機会だったという。

ラジオ時代の黄金期支える

へ出ていた熊田為宏(元山形大教授、仙台市)が佐藤とともに指揮を務めるようになる。二十六年ごろには、熊田も二十八人ほどに増えた作品演奏への意欲が一層強まった。番組での交流がきっかけとなって、翌二十七年から始まった仙台放送管弦楽団と札幌放送管弦楽団(NHK札幌中央放送局専属)の合同演奏会の実現

「オケにとって全く初めての曲で団員は慌てたが、やるよりほかはないと覚悟を決めた」と熊田は振り返る。「緊張感にあふれる演奏は、聴衆を沸かせ、五日後の「土曜コンサート」で放送された。

もつのは、仙台市内の合唱団による「メサイア」合同演奏会での活躍だ。二十九年(第六回)から、最後となった三十四年(第十一回)まで、熊田の指揮で出演した。また東北大学交響楽団など、仙台市内のアマチュア団体の演奏会にエキストラとして出演、オーケストラ活動を支援した。しかし三十七年、回数出演契約に移行、団員の新規採用をやめてからは、次第に勢いは衰えていく。四十年、熊田が辞任してからは、ポピュラー音楽の編曲、指揮を担当していた小菅隆(仙台市)を中心に「質の高いポピュラー音楽の追求」(小菅)に目標を定め、東京放送管弦楽団との合同演奏会なども開いたが、活動の範囲は狭まっていた。テレビ時代に入り、番組制作が中央偏重となったことは、仙台放送合唱団同様、同管弦楽団の存在基盤も揺るがしていったのだ。(敬称略)

の背景には、こうした欲求もあった。「七夕同様、年に一度の逢瀬(おうせ)を、団員たれもが楽しみにしていた」と熊田という。仙札合同は二十七年三月と六月、それぞれ札幌、仙台で行われたのを皮切りに、翌年から三十八年まで毎年、両都市交互に開催された。両楽団とも一管編成だが、台同でエキストラを加えれば、大規模な曲に取り組める。団員にとって、選曲上の欲求不満を解消する、貴重な機会だったという。

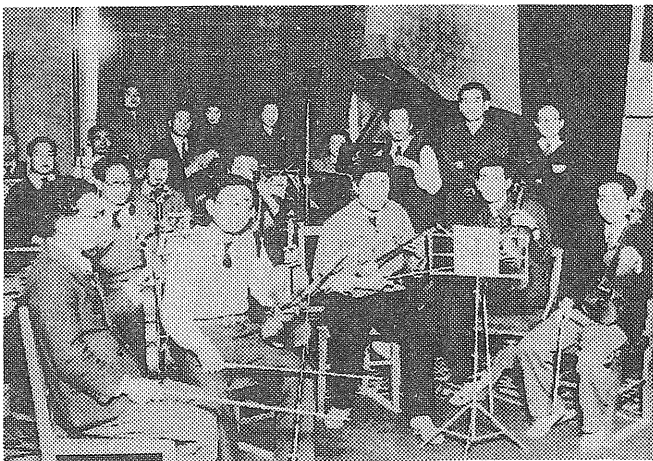
「緊張感にあふれる演奏は、聴衆を沸かせ、五日後の「土曜コンサート」で放送された。

もつのは、仙台市内の合唱団による「メサイア」合同演奏会での活躍だ。二十九年(第六回)から、最後となった三十四年(第十一回)まで、熊田の指揮で出演した。また東北大学交響楽団など、仙台市内のアマチュア団体の演奏会にエキストラとして出演、オーケストラ活動を支援した。しかし三十七年、回数出演契約に移行、団員の新規採用をやめてからは、次第に勢いは衰えていく。四十年、熊田が辞任してからは、ポピュラー音楽の編曲、指揮を担当していた小菅隆(仙台市)を中心に「質の高いポピュラー音楽の追求」(小菅)に目標を定め、東京放送管弦楽団との合同演奏会なども開いたが、活動の範囲は狭まっていた。テレビ時代に入り、番組制作が中央偏重となったことは、仙台放送合唱団同様、同管弦楽団の存在基盤も揺るがしていったのだ。(敬称略)

「緊張感にあふれる演奏は、聴衆を沸かせ、五日後の「土曜コンサート」で放送された。

もつのは、仙台市内の合唱団による「メサイア」合同演奏会での活躍だ。二十九年(第六回)から、最後となった三十四年(第十一回)まで、熊田の指揮で出演した。また東北大学交響楽団など、仙台市内のアマチュア団体の演奏会にエキストラとして出演、オーケストラ活動を支援した。しかし三十七年、回数出演契約に移行、団員の新規採用をやめてからは、次第に勢いは衰えていく。四十年、熊田が辞任してからは、ポピュラー音楽の編曲、指揮を担当していた小菅隆(仙台市)を中心に「質の高いポピュラー音楽の追求」(小菅)に目標を定め、東京放送管弦楽団との合同演奏会なども開いたが、活動の範囲は狭まっていた。テレビ時代に入り、番組制作が中央偏重となったことは、仙台放送合唱団同様、同管弦楽団の存在基盤も揺るがしていったのだ。(敬称略)

もつのは、仙台市内の合唱団による「メサイア」合同演奏会での活躍だ。二十九年(第六回)から、最後となった三十四年(第十一回)まで、熊田の指揮で出演した。また東北大学交響楽団など、仙台市内のアマチュア団体の演奏会にエキストラとして出演、オーケストラ活動を支援した。しかし三十七年、回数出演契約に移行、団員の新規採用をやめてからは、次第に勢いは衰えていく。四十年、熊田が辞任してからは、ポピュラー音楽の編曲、指揮を担当していた小菅隆(仙台市)を中心に「質の高いポピュラー音楽の追求」(小菅)に目標を定め、東京放送管弦楽団との合同演奏会なども開いたが、活動の範囲は狭まっていた。テレビ時代に入り、番組制作が中央偏重となったことは、仙台放送合唱団同様、同管弦楽団の存在基盤も揺るがしていったのだ。(敬称略)



二十三年、四年の仙台放送管弦楽団の出演番組は、ほかに「音楽便り」(全国放送、月一回)、「食後の音楽」(週一回)をはじめ、児童合唱の「東北うたの本」(児童合唱の伴奏)、ローカルタイム「日曜楽人の百選」など。指揮は佐藤、熊田のほか、仙台放送合唱団専任の福井文彦(故人)や、児童合唱の指導で活躍していた作曲家の海録義美(仙台市)らも担当した。このころは学校音楽教室や校歌発表会などにも、積極的に出演している。二十八年から始まった「HK(仙台放送局)のHK放送芸術祭」後のHK放送芸術祭も、同管弦楽団の重要な活動の場となった。

仙台放送管弦楽団

団(NHK札幌中央放送局専属)の合同演奏会の実現

一スタジオ

◇ 25年8月に結成

経済的な基盤の弱い、一般市民によるアマチュアオーケストラ活動には、いつの時代でも困難が付きまとう。仙台では戦前から、永続的な楽団設立を目指す動きがあったものの、まとまった成果を残すには至らなかった。しかし戦後、時代が安定するにつれ、自分たちのオーケストラをつくりたいという人々の情熱は抑えがたいものとなる。二十五年八月、仙台市民交響楽団(後の仙台交響楽団)の結成で一つの実を結んだ。

同月末、水書地義捐(えん)金募集音楽会によって活動を開始した同交響楽団は、以後約二十二年間にわたって演奏活動を展開、仙台の市民オーケストラ運動の先駆的役割を果たすことになる。

結成の中心となったのは、元東北学院講師の黒沼幸四郎(佐賀大名管教授、東京・世田谷区在住)と、戦前十年以上にわたって東北大学交響楽団の常任指揮者を務めた、仙台通信病院長齋藤弘(東村山市)、仙台一高教諭館山甲午(平家菟野研究家、仙台市、歯科医の岡部衛(同)、眼科医の米地秀三(故人)ら。

「札幌などでは市民による活動が盛んだっただのに、東北の拠点都市に一つもないのでは恥ずかしい。何か

やりたいと思っていた人はかなりいた。黒沼は、旗揚げに踏み切った気持ちでこう語る。

民謡研究家の武田忠一郎(故人)、東北大学交響楽団でも活動していた薬剤師の宮城徳雄(フルート教師、仙台市)ら約二十人が、呼

黒沼の指揮でモーツァルトの「アイネ・クライン・ナハトムジーク」などを演奏。同年十二月の第一回宮城県芸術祭(常盤木学園講堂)にも参加し、同じ曲を取り上げた。

オーケストラにとって練習会場の確保も難題の一つだったが、同交響楽団はこの点では恵まれていた。当初は会場探しに苦労したものの、仙台市公会堂が落成(二十五年十一月)してからは、ここを無料で使用できるようになった。仙台市もオーケストラの育成に関心を示していたのである。二十七年春には、藤崎社長の藤崎三郎助を団長に迎え、新体制がスタート。以後年二回の定期演奏会が定着する。「プロを超える演奏をし

歌うというアクセントもあつた。だがゆっくりにあつても、齋藤の指揮の下、演奏水準は著実に向上していったのである。三十一年の定演には、仙台放送管弦楽団の熊田為宏(元山形大教授、仙台市)が二度にわたって客演、磨きかけた

(三十四年十二月)、白石公演(三十六年十月)、盛岡公演(三十七年七月)などが実現している。三十六年からは、団員も五十人近くとなり、オーケストラ史上最高となった。

しかし三十七年に入ってから、客足は急速に遠のいていく。時代が変わって娯楽が増え、レコードで優れた演奏を追い求める人も多くなった。団員は自腹を切つて、割り当てるチケットをさばっていたが、無理が掛かり出した。と岡部は振り返る。エキストラへの謝礼、楽器購入などで累積赤字がかさみ、団

の運営は苦しさを増した。こうした状況を改善するため同年、思い切った改革に取り組んだ。既に発足していた賛助会員制度を廃止させ、仙台交響楽協会(藤崎会長)を設立。十一月の定演からは、団の名称を仙台交響楽団と変えたのである。「心機一転し、立て直しを図るための措置」(宮城)だった。

同年十二月には青山学院オラトリオンサエティとハシデル「メサイア」で共演(仙台市公会堂)。三十八年からは、一時的に復活した市内合唱団による合同「メサイア」演奏会にも出演した。しかし一度失った勢いは取り戻せず、四十二年の春で定期演奏会は中断。その後フルートの小出信也(NHK交響楽団)を招き演奏会を開いたものの、練習に人が集まらなくなり、四十六年には自然消滅してしまう。経済面での窮乏は、団員の熱意も奪ってしまったのである。

戦後初の市民オーケストラ運動は、こうして志半ばで崩壊してしまつた。しかしその精神は音楽愛好家によって脈々と引き継がれ、新たなオーケストラ運動を生み出していくのである。(敬称略)

世間の音楽 戦後の歩み

◇ 9 ◇

地元演奏活動に大きく貢献

黒沼 齋藤の指揮でバツハの「管弦楽組曲第二番」を演奏した。管を

り、黒沼、齋藤の指揮でバツハの「管弦楽組曲第二番」(シューベルトの「未完成」)などを演奏した。管を中心に進駐軍が応援に駆け付けたこともあって、同七月には、多賀城駐屯地で日米合同演奏会が実現している。同年十一月の第二回定期演奏会からは黒沼が退き、齋藤が常任指揮者に就任した。

ようという情熱は、だれもが持っていた。だが、やる気はあつても、仕事の都合でなかなか練習に出られない。演奏会間際になると急に集まるという状況で、思いついた選曲はできなかつた。齋藤はこの時代の状況をこう語る。

二十九年六月の第六回定期演奏会からは、黒沼が退き、齋藤が常任指揮者に就任した。

二十九年六月の第六回定期演奏会からは、黒沼が退き、齋藤が常任指揮者に就任した。

二十九年六月の第六回定期演奏会からは、黒沼が退き、齋藤が常任指揮者に就任した。

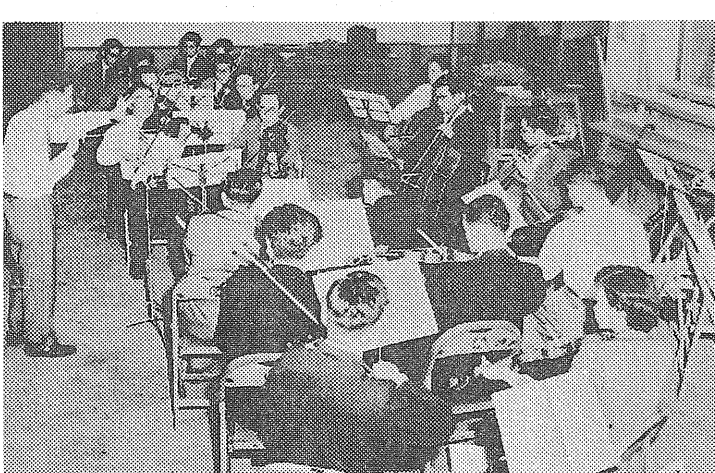
二十九年六月の第六回定期演奏会からは、黒沼が退き、齋藤が常任指揮者に就任した。

二十九年六月の第六回定期演奏会からは、黒沼が退き、齋藤が常任指揮者に就任した。

二十九年六月の第六回定期演奏会からは、黒沼が退き、齋藤が常任指揮者に就任した。

仙台市民交響楽団

水書地義捐 金募集音楽会 (東北大学中 央講堂)では、



二十九年五月当時の、仙台市民交響楽団の練習風景。指揮は齋藤弘(仙台市公会堂集 会室で)

今回からは再び合唱活動に目を向け、大学合唱団や児童合唱、その後の一般合唱団の動きなどを追ってみたい。

◇まず医学部で発足

東北大学では、終戦後かなり早い時期から、各学部合唱を奨励し、小さなグループが存在した。こうした中、最初に合唱団としてまとまった活動を始めたのは、医学部合唱団と、工学部内に生まれた工明会合唱団である。東北大学交響楽団の定期演奏会と一体だった音楽部の定演に出演するなど、活発な活動を行った。殊に工明会合唱団は、後の全学一体となった東北大学合唱団、同男声合唱団の誕生の際にも、重要な役割を果たすことになる。今回は以上の四団体を中心に、東北大学の合唱団の系譜をたどってみたい。

医学部合唱団は、医師、看護婦らの団体として二十一年に発足した。同年、福井文彦(後に東北大、宮城教育大教授、故人)の指揮で、医学部中央講堂で演奏会を開いている。二十二年早春、医学部学生の斎藤信彦(産婦人科医、三鷹市在住)が指揮者に就任、学生を中心とした団体としての基盤が固まった。

当時は二十人ほどの混声合唱団で、女声は事務職員や、近くの専門学校「母の

服装学院」の生徒らが参加した。二十二年十一月、戦後初めて開かれた音楽部定演に早くも登場、二十四年十一月のベートーベン「第九」東北初演でも活躍した。また二十二年からは「医学祭」にも参加、二十四年のステージでは、東北大学交

10

戦後の歩み

響楽団の応援を得て、「タンホイザー」の「大行進曲」などを取り上げている。斎藤が仙台を離れた後、二十五年からは小川卓郎(外科医、角田市)二十七

大学合唱団

科博之(仙台二高校長、同)

ルなどでも活動していた仁科博之(仙台二高校長、同)公堂

東京・荏原保健所長、三鷹市)が指揮を引き継ぎ、独自の活動を展開した。しかし二十九年三月、斎藤が卒業してからは、強力な指導者に恵まれず、間もなく消滅してしまっ

◇工学部でも結成へ

工明会合唱団は二十二年秋、工学部学生の田中成一(武蔵野市)が中心となって結成した。当初メンバーは十数人だったものの、翌北初演では中心的な役割を果たす。翌年十一月の定演

に指揮者就任を要請した。「大学外部からの応援に頼らない、純粋な学友会合唱団を作るべき」と、男声合唱団に興味を持っていた仁科は、当初就任を断った。だが男女のバランスを取ること、男声合唱団創立に協力するということ、三井らの約束を取り付けたこと

21年、東北大で

本格的に活動

宏電子役員、佐久市)ら、有力メンバーを加え体制が固まる。十一月には音楽部定演に出演した。

では、シューベルトの「ミサ曲第五番」を歌うなど、以後同交響楽団との連携を強めた。

「発表する」というよりも、自然発生的に集まった仲間同士で、合唱を楽しむという会(泉山)という色彩が濃く、女子校との交歓演奏会なども積極的に行っ

東北大学合唱団にとって、この二つの合唱団は、ともに仁科が指揮を務め、重複する団員がますます増えた結果、切り離せない関係にあった。仁科の時代、同男声合唱団は、二十六年六



団が誕生したのである。32年に東京公演もこの二つの合唱団は、ともに仁科が指揮を務め、重複する団員がますます増えた結果、切り離せない関係にあった。仁科の時代、同男声合唱団は、二十六年六月の音楽部定演で初めてス

月の音楽部定演で初めてステージに立ち、同年秋の全日本合唱コンクール全国大会では三位に入賞。十二月には一関市で演奏会を開いたが、いずれも東北大学合唱団の名称で出演していた。仁科の後、同男声合唱団の指揮は戸田靖男(仙台一高教頭、仙台市)、松永昌(鈴与役員、清水市)、新田昭夫(石巻中教頭、石巻市)、岡崎光治(作曲家、仙台市)と受け継がれ、基盤は揺るぎないものとなっていく。

×モ 工明会合唱団が加盟した。工明会は、東北大学合唱団結成後、表面に出ることはなかった。同合唱団の男声メンバーを加え、「東北大学メソルコー」の名で演奏会を開いた。同連盟は二十四年六月十四日、福井文彦を理事長に発足、参加は十八団体で、東北大からは、東北

は半年ほどで挫折)ことがきっかけだった。わずかにいた東北大女子学生が、新合唱団に参加するため、辞めていったのである。「女声合唱団ができるほど学内に人がいるのに、足りないから外に応援を頼む」という理屈は通らない。この時、東北大学合唱団と同男声合唱団の運営主体は完全に同じだった。団員がより重視していた男声に絞ろうと考えた。当時委員長を務めた及川洪(東北大教授、仙台市)は語る。

東北大学合唱団の消滅で、東北大学男声合唱団は、外部的にもこの名称での活動を開始する。岡崎の時代、三十二年七月には大学合唱協会(DGK)に加盟、そのの援助で同十一月、東京公演を実現させた。また翌二月の「在仙大学合唱団懇談会」(翌年「七声会」と改称)結成の際も中心となるなど、強いリーダーシップを発揮するようになっていく。(敬称略)

学制改革によって、東北大学に教養部が設立されたのは二十四年六月。仙台市富沢の旧制第二高校跡に第一教養部が置かれたのをはじめ、第二教養部(南六軒丁、旧仙台工業専門学校跡)、第三教養部(長町越路、旧宮城東女子専門学校跡)、教育教養部(北七番丁、旧宮城東師範学校跡)が生まれた。第一、第三教養部は二十七年四月に統合され第一教養部に、三十二年四月には第二教養部も統合し、富沢分校となった。同時に教育教養部は北分校と改称している。三十三年には両分校とも川内地区に移転された。

こうした変遷の中、教養部では本部と異なった独自の合唱活動が行われた。整備統合に伴って形を変えながら、後の東北大学混声合唱団に結び付いていくのである。今回はこうした流れと、三十年代初め活動を開始した東北大学女声合唱団に焦点を当ててみる。

三年四月、文科系が川内地区に移転した後は、理科系だけの、二十人程度で活動を続けた。同年九月、教養部全体が川内に集結、新たな時代を迎えるが、この時同合唱団は重大な危機に陥った。移転を契機に女声メンバーが全員退団、混声合唱団として活動できなくなったのである。しかし委員長杉本眞雄(杉本商店社長、大阪府高石市)ら熱心な団員の活動の結果、退団した女声メンバーも復帰。三十四年三月四月、文科系が川内地区に移転した後は、理科系だけの、二十人程度で活動を続けた。

三年四月、文科系が川内地区に移転した後は、理科系だけの、二十人程度で活動を続けた。同年九月、教養部全体が川内に集結、新たな時代を迎えるが、この時同合唱団は重大な危機に陥った。移転を契機に女声メンバーが全員退団、混声合唱団として活動できなくなったのである。しかし委員長杉本眞雄(杉本商店社長、大阪府高石市)ら熱心な団員の活動の結果、退団した女声メンバーも復帰。三十四年三月四月、文科系が川内地区に移転した後は、理科系だけの、二十人程度で活動を続けた。

顧問指揮者に招いた。佐藤は翌年の定演で、「ハイドン」のオラトリオ「四季」をオーケストラ伴奏(東北大交響楽団が共演)で取り上げるなど、多大な影響を与える。「若さと熱意にあふれる、上昇期の合唱団」として、大曲に挑むのは有意義だし、学生団体同士の協力し合う姿勢も引き出したかったと佐藤は語る。この時はオーケストラのパート譜も合唱団員が、手書きで準備するなど、一丸となって取り組んだ。同年、団員数は百十人を超えた。

当初は、ほとんどの学部が二つの教養部にまたがっていたが、二十五年から同一学部の学生は同一教養部に集められるようになる。文、理、農各学部は第一教養部、工学部は第二教養部、法、経済学部は第三教養部、教育学部は教育教養部という形が整った。東北大学混声合唱団の歴史は、忘れられない出来事となったのは、四十一年夏、日本フィルを率いて来仙した小沢征爾(当時東北大学)

は第二教養部、法、経済学部は第三教養部、教育学部は教育教養部という形が整った。東北大学混声合唱団の歴史は、忘れられない出来事となったのは、四十一年夏、日本フィルを率いて来仙した小沢征爾(当時東北大学)

は第二教養部、法、経済学部は第三教養部、教育学部は教育教養部という形が整った。東北大学混声合唱団の歴史は、忘れられない出来事となったのは、四十一年夏、日本フィルを率いて来仙した小沢征爾(当時東北大学)

は第二教養部、法、経済学部は第三教養部、教育学部は教育教養部という形が整った。東北大学混声合唱団の歴史は、忘れられない出来事となったのは、四十一年夏、日本フィルを率いて来仙した小沢征爾(当時東北大学)

世に音未夜第

戦後の歩み

11

第一教養部が「推進役」担う

第一教養部に理学部学生の仁科博之(仙台三高校長、仙台市)が中心となって混声合唱団を結成したのは、二十四年秋。発足当時のメンバーは約三十人で、第一教養部合唱団と名付けられた。同じころ、規模は小さかったが、第二、第三教養部でも合唱団が発足。翌二十五年十二月には、教養部学生会音楽部主催の合同発表

春には五十人程度となる。教養部講師の小沢俊夫(筑波大比較文化学類長、川崎市)の指導で、元米軍川内キャンプの教会内で練習を続けた。夏には教育学部音楽専攻の佐藤啓司(岩手県教委主任指導主事、一関市)を指揮者に迎え、体制を整えた。これが同年秋の東北大学川内混声合唱団の旗揚げへとつながった。翌三十五年七月には第一回定期演奏

年十二月には前回紹介した仙大合唱懇談会(のちに七声会改称)にも加盟している。遠藤安行(秋田大学助教、秋田市)が指揮者を務めた三十六年からの三年間は、合唱団の基盤を固める上で、重要な時期となった。三十七年に団員の三年制(翌年には四年制)を確立し、東北大学混声合唱団と改称。尚絅学院短大講師

は百十人を超えた。しかし四十年、教育学部教員養成課程が宮城教育大となり、女声団員確保が難しくなる。佐藤も顧問指揮者を辞任、厳しい時期を迎えたが、常に一層の高みを目指す姿勢は失われなかった。四十四年、客演指揮に浜田徳昭(故人)を招き、モーツァルトの「レクイエム」を演じた。

初めて単独でのオーケストラとの共演が実現した。東北大学混声合唱団の第4回定期演奏会(38年10月、東北大学川内記念講堂)

は第二教養部、法、経済学部は第三教養部、教育学部は教育教養部という形が整った。東北大学混声合唱団の歴史は、忘れられない出来事となったのは、四十一年夏、日本フィルを率いて来仙した小沢征爾(当時東北大学)

は第二教養部、法、経済学部は第三教養部、教育学部は教育教養部という形が整った。東北大学混声合唱団の歴史は、忘れられない出来事となったのは、四十一年夏、日本フィルを率いて来仙した小沢征爾(当時東北大学)

は第二教養部、法、経済学部は第三教養部、教育学部は教育教養部という形が整った。東北大学混声合唱団の歴史は、忘れられない出来事となったのは、四十一年夏、日本フィルを率いて来仙した小沢征爾(当時東北大学)

大学合唱団

短大教授、東京・板橋区を



東北大学女声合唱団が、教育学部教員養成課程主任担当教官の福井文彦(後に教授、故人)を指揮者に発足したのは三十七年七月。中心となったのは教育学部音楽専攻の安藤邦子(現内木、仙台市)中教諭、仙台中教諭、五十嵐通子(現伊藤、石巻教育事務所指導主事、塩釜市)の二人で、「外部からの応援に頼らない、純粹な学内の女声

29年に重大な転機

在仙の私立大学の多くで合唱団が組織されたのは、三十年代初め。七声会の活動や個性を生かした独自の活動によって、仙台の音楽界に彩りを添えるようになった。こうした動きに先駆け、東北学院大学では、戦後いち早く合唱団の活動がスタートした。東北学院専門学校だった二十一年春、戦前から活動していた音楽部が再建され、後の東北学院大学グリーククラブへの歩みを開始したのである。ここではコンクール、演奏旅行など目覚ましい活動をした同グリーククラブと宮城学院女子大学グリーククラブを中心に、私立大学への動向を振り返ってみたい。

東北学院が戦時中の航空工業専門学校、戦後直後の工業専門学校を経て、伝統的な文系系の学校に復帰したのは二十一年四月。音楽部再建の中心となったのは、航空工専時代からの学生渡部和(NHK文化センター理事、所沢市在住)らである。

「再建にこだわったわけではないが、終戦の解放感の中、何かやらなければという義務感のようなものにとらわれていた」という渡部らの熱意に動かされたのは約二十人。専任音楽講師の黒沼幸四郎(佐賀大名音楽教授、東京・世田谷区)の指導で礼拝サービスを中心

に活動を始めた。翌三十二年には東北大学学生新聞主催のコンクールにも出場した。二十三年、黒沼が東北学院を辞めた後は、学生だけで運営、同年初の演奏旅行(塩釜、石巻ほか)、仙台ボランティヤコワイヤと合同

な転機を迎える。専任音楽講師としてヒクトー・セアル(日本大学講師、東京・渋谷区)が赴任、指導を受けるようになったのである。セアルは技術向上に情熱を注ぐとともに、黒人霊歌を中心にレパートリーの拡大に努め、同グリーククラブの基礎固めに貢献した。

「黒人霊歌はほとんどが日本の音階同様、五音音階だし、英語の発音の傾向にも、日本人と黒人には共通する点がある。本物に近い演奏ができるはずだ。セアルは黒人霊歌を重視した理由を語る。そしてその指導は、独自の「学院トーン」を生み出した。三十年夏には大規模な北海道演奏旅行を実施。この勢いで同十一月には、仙台市公会堂で第一

定期演奏会を開いていく。新制大学になった後、二十七年には初の北海道演奏旅行を実施、これがきっかけで、間もなく東北学院大グリーククラブと名乗るようになった。

同グリーククラブは二十九

年十月、重大

世に音家常 戦後の歩み

12

早々と21年春 東北学院再建

蔵野音楽大学講師をしてい、由を語る。そしてその指導は、独自の「学院トーン」を生み出した。三十年夏には大規模な北海道演奏旅行を実施。この勢いで同十一月には、仙台市公会堂で第一定期演奏会を開いていく。

33年全国大会へ
セアルは三十二年の第三

宮城学院31年創立
宮城学院女子大学グリーククラブは二十一年四月、音楽科教授ヒュース・ゲッツ(レバノン・バレー大学教授、米

宮城学院女子大講師、仙台市)が指揮をし、同年のコンクールでも全国三位に入賞。翌年からは五年連続して東京公演を実施。定演、他の大学との合同公演と、積極的に活動した。

高橋は四十年、指揮者を退き、同グリーククラブは学生を主体とした団体として

青山学院大学グリーンハーモニーとの交歓演奏会での東北学院大学グリーククラブ。指揮は海鋒博美(33年5月、仙台市公会堂

定演の直後、大学院入学のため米国に帰り、セアルの薫陶を受けた海鋒博美(徳陽相互銀行勤務、仙台)が指揮を引き継ぐ。海鋒は、初めて全日本合唱コンクール全国大会に出場し、三位に入賞。以後、十年連続全国大会出場という金字塔を打ち立てる。セアルは三十三年の全国大会前日に来日、前触れなしに会場を訪れ、団員を感激させた。海鋒は卒業後も顧問指揮者として活躍、セアルも武

つて創立された。ゲッツは合唱向きの声質を持つ団員を確保するため、オーディションを実施。百人を超える応募者から約五十人を選ぶなど、徹底した取り組みを見せ、合唱団育成に多大な力を注いだ。結成からわずか半年後の同年十一月には、全日本合唱コンクール全国大会三位入賞に導いていく。三十二年三月には第一定期演奏会を開いた。ゲッツが同年十月、同志社大に去った後は、ゲッツの推薦で団員の高橋とみえ

前にも少し触れたが、三十二年十二月、在仙大学合唱団懇談会として発足した七声会(翌年改称)は、各団体の交流、技術向上、単独で演奏会を開催できない団体の演奏活動などのため、重要な役割を果たすことになった。発足当時参加したのは、東北大男声、同女声合唱団、東北学院大学グリーククラブ、宮城学院女子大学グリーククラブ、東北薬科大学合唱団、三島学園女子短大合唱団、尚絅学院短大合唱団の七団体。三十四年以降

法講習会、合唱研究会を開催するなど、多彩な活動を展開した。四十六年には、最高の十大学、十三団体が参加、隆盛を極めたが、以後徐々に加盟団体が減少、勢いを失っていく。



ここで東北学院大学グリーククラブが母体となって誕生した二つの団体、女声合唱団キヤロラ、混声合唱団ヒムネスに触れておこう。

同大の音楽部には、二十六年ごろから、女子の入りが見られるようになり、混声合唱も行いうようになった。二十八年七月、横山昭一を加えて混声合唱団となった。四十六年十一月に第一定期演奏会を開催、以後宗教曲を重視した活動を続けていく。(敬称略)

て、新たな一歩を踏み出すことになる。当時の団員は「自分たちの力を最大限に引き出してくれる人」として宮城教育大教授の福井文彦(故人)の指導を受けること熱望していた。福井がこれにこたえ、初めて定演に登場したのは四十一年十一月。以後十回にわたって客演した。福井の指揮で四十三、四十四年と連続して全日本合唱コンクール全国大会で二位に入賞するなど、再びコンクールでも活躍するようになる。

この際、混声合唱を行う時の名前として考え出されたのが、キヤロラである。その後目立った活動はなかったが、三十五年、女声メンバーが多くなったがきつかけとなり、三十六年二月、団員の菅原弘子(現鈴木、弘前市)の指揮で第一定期演奏会(仙台市・日立ファミリースター)を開催。女声合唱団としての本格的な活動を開始する。翌年は定演のほか盛岡、宮古、水沢、千厩への演奏旅行も行った。以後学生指揮が続くが、四十五年の定演で三島学園講師今井邦男(尚絅学院短大助教授、仙台市)を迎えて以来、客演指揮者を招くようになる。

20年末に産ぶ声

終戦を境にして、ラジオの音楽放送の内容が一変したことは、前にも触れたが、最も著しい影響を受けたのは音楽曲である。軍歌など戦争中の国民感情を反映した歌に変わるものを求めて、制作側としても、しばらくは暗中模索の状態が続いた。こうした状況下、早くから番組に組み込まれるようになったのが、文部省唱歌、童謡などの「緩衝地帯」だった。NHK仙台中央放送局(現仙台放送局)でも、昭和二十年十月から近くの小学校の児童らを使つての放送を開始している。

だが当時は唱歌も連合軍総司令部(GHQ)の検閲の対象となり、音楽の教科書が墨で塗りつぶされた時代。子供たちのレパートリーはかなり制限されていた。同放送局は、子供たちに夢と希望を与えようと、東北在住の作曲家、詩人の協力を得て、新しい子供の歌作りに乗り出す。間もなく人気番組「東北うたの本」が生まれた。この企画と連動して誕生し、同番組を中心に、幅広い活躍をしたのが仙台放送児童合唱団である。「東北うたの本」は東北各地に放送され、多くの子供たちの心に強烈な印象を与えた。同時に同児童合唱団も、忘れ

られない存在となつていった。

仙台放送児童合唱団が発足したのは、二十年末。仙台市内の二六の小学校から、校長の推薦を受けた男子一人、女子二人(五、六生中心)が参加、七十八人でスタートした。指揮、指

13

戦後音楽の歩み

全国中継にも登場

同児童合唱団が初めて放送に登場したのは、二十一年二月。この時は同放送局近郊の上杉山通小学校庭、南北両班の全員が集まり、作曲家の福井文彦(後に東北大、宮城教育大教授、故)の指揮、仙台放送管弦楽団の伴奏で、福井の作品「みんな元気な私達」(詩・宮沢孝子と文部省唱歌うぐいす)を歌った。

東北大学中央講堂などから、単発で放送。同年春には、夕方放送の「子供の間」の中に、週一度の定時番組「東北うたの本」が設けられ、同放送局からの本格的な放送が始まった。作曲家による歌唱指導、仙台放送管弦楽団の伴奏というスタイルが固まり、二つの班が交代で出演した。

「東北うたの本」の作曲を最も多く手掛けたのは海鋒で、佐藤長助(故人)、福井らが続く。海鋒の「おく

多くの子供に 夢と希望を...

び変えたり、雪のちらつく中、二時間も立たされていった。寒くて、早く帰りたいと、それはかり考えていた。当時連坊小路小の児童だった菅原千恵子(現大友、東京・大田区)は振り返る。子供たちには厳しい初放送だったようだが、さわやかな歌声は、絶大な歓迎を受けた。

以後、同市の五橋中や、

したが、二十年代の学校音楽教育の副教材としても活用された。仙台放送児童合唱団は「東北うたの本」のほかにも、放送を中心に目覚ましい活動を続けた。発足当初から定期的に全国中継に登場していたのをはじめ、二十二年ごろからは、子供の日常生活を歌によって紹介する「唱歌組曲」、音楽劇、子供オペレッタなどにも数多く出演している。オペレッタは富田(める)の森幼

メモ

東北うたの本 全五巻中に収められている作品数は、海鋒が十五曲(本文で紹介したばかりに「けし木ぼこ」はの足おとなど)、佐藤が九曲(同「ムラノコ」「つきぎ草」など)、福井が六曲(同「かきえな」など)。また安倍盛が「水すま」し「追羽根」など六曲、草

川信が「ねんねんころり」など三曲、佐々木不才が二曲ずつ寄せている。詩は春日こうじの八曲が最高で、草刈辰雄の七曲、草刈亀一郎、原賀の四曲がこれに続く。海鋒の一番のあしおと「仲よしの歌」は、小学校の音楽の教科書にも載り、長く歌われた。また

ている。この間、二十六年ごろには参加校が徐々に絞られ、南北二班を統合した二十年代に海鋒を補佐して指導に当たった小学校教諭は鎌田孝(故人)、内海正郎(故人)の探譜、海鋒の編曲による東北のわらべ唄が放送の中心になる。そして三十九年二月、番組が終了。これに伴い同児童合唱団も解散に追い込まれてしまった。

から児童合唱団が存続し、また児童合唱団があったから番組も続いた。当時のプロデューサー半沢和郎(仙台市)は語る。だがテレビ時代に入り、ラジオの地方制作番組を保持することは、難しくなっていたのである。東京オリンピックを間近に控えた、時代の変わり目でもあった。仙台放送児童合唱団は、小学五、六年生が中心だったが、同合唱団を「卒業」したOGの一部はHKGジュニアコーラスに参加した。二十五年二月、中学生約二十人でスタートした同コーラスは、月に一度放送に出演。海鋒の指揮、当時東北大付属小教諭だった斎藤聡子(仙台市)のピアノ伴奏で、中田喜直、清水清、フオスターらの作品を好んで歌った。HKGは仙台中央放送局のコールサインである。しかし同コーラスもテレビ時代への移行の影響を受け、三十六年には姿を消してしまつた。(敬称略)

仙台放送児童合唱団

市内の小学校の音楽担当の教諭も指導に協力した。



「東北うたの本」のためテレビ時代で「幕」

昭和34年春に発足

日本初のユネスコ(国連教育科学文化機関)活動への民間協力団体として、仙台ユネスコ協会(当初は同協力会)が発足したのは昭和二十二年。三十二年の仙台ユネスコ会館建設を機に、さまざまな文化活動に手を広げるようになった。

児童合唱団の育成に強い意欲を見せていた作曲家で東北大学講師の福井文彦(後に東北大、宮城教育大教授、故人)が、同協会に合唱団設立を働きかけたのはこの時期。これが実り、三十四年春、同協会内に誕生したのが仙台少年少女合唱隊である。

福井は三十一年二月、初めて仙台を訪れたウィーン少年合唱団に強い刺激を受けた。

「日本人の生活にはリズムがない。合唱を通して子供たちにこれを身に着けさせ、仙台の文化の象徴となるような児童合唱団を作りたい」というのが、福井の口癖だった。福井とともに同合唱団創立に携わった、当時の同協合理事長永野為武(東北大名譽教授、仙台市)は、協会を動かした福井の熱意を、こう説明する。

仙台市内の各小学校の三、六年生を対象に、入隊希望者を募ったのは三十四年三月。翌四月、百二十人で発足した。指導に当たったのは、指

揮の福井のほか、伴奏が東北大講師だった大泉勉(宮城教育大教授、仙台市)、発声指導が三島学園教諭の五十嵐通子(現伊藤、石巻教育事務所指導主事、塩釜市)。発足当初は黒黒嘉子(現伊藤、宮城県松島町)も協力した。

間もなく永野の詩、福井

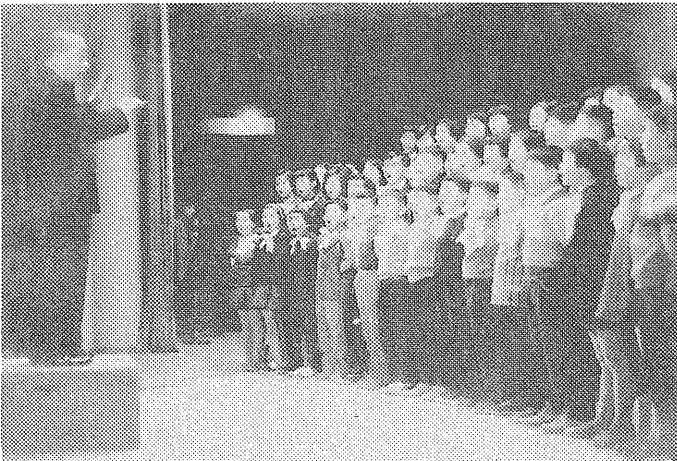
戦後の歩み

14

の作曲による「仙台少年少女合唱隊のうた」も生まれ、毎週一回、仙台ユネスコ会館で練習、八月には作並で初めての夏期台宿も実施した。十二月には早くも第一回発表演奏会(仙台市公会堂)を開いている。この時は福井の編曲による子

仙台少年少女合唱隊

音楽性を高く評価する異例の審査が付



仙台少年少女合唱隊の第一回発表演奏会。指揮は福井文彦。昭和34年12月、仙台市公会堂

子供のための優れた曲次々

主宰の児童合唱団として、再スタートを切ったのである。それまで仙台ユネスコ協合理事が務めていた隊長に、島野武仙台市長(故人)を迎えた。同年十月には、石巻演奏旅行も実施、発表演奏会も以後、毎年開くようになる。四十年から、当時朴沢女子高教諭の姉齒けい子(宮城学院女子大講師、仙台市)が発声指導を担当するようになった。

「東北のおもちゃ歌」(東北放送の委嘱作品)は四十年の第二十一回芸術祭合唱部門に、同ラジオ放送を通じて参加した。子供のための作品で、審査の対象外という理由で受賞は逃したものの、その音楽性を高く評価する異例の審査が付

供のための小品や、福井の「谷の一本橋」(ふじまな泉)などを歌った。福井と大泉のピアノ連弾、指導者による四重唱なども織り込まれた。

三十五年には第二回発表演奏会、教科書用のレコード吹き込みなどを行ったのをはじめ、三十七年には初めてテレビに出演(東北放送)するなど、活動の場を広げていくが、三十九年六月、大きな転機を迎えることになる。仙台ユネスコ協会の方針変更などもあって、同協会から独立。福井

「子供の声を聴くと疲れがとれる」と言っていた。子供の純粋な声を通して、自分の生き方、音楽を模索していたのだと思う。大泉は振り返る。そして福井の情熱は「東北のおもちゃ歌」(四十二年)「地球よ

け加えられた。」「とにかく子供のために良い作品を作ろうと、心魂を傾けていた。子供が本当に好きだったし、音楽の原点を児童合唱に見ていたのかもしれない。宮沢は当時の福井についてこう語

「仙台少年少女合唱隊は、当初ユネスコ協会からの独立とともに、組織的にも一体となった。隊員は当初小学三、六年生を対象としていたが、四十七年からは研究生という形で、中学生も参加するようになった。」

▽東北放送児童合唱団のピアノ伴奏者は、当初五十嵐あや子(現現内海、仙台市)や北百子(同市)が務め、三十年からは、五十嵐に代わって三浦久子(現斎藤、宮城学院女子大講師、同)が受け持つようになった。

▽仙台少年少女合唱隊は、発足当初仙台少年合唱隊、仙台少女合唱隊として、別々に組織された。それぞれ隊長は仙台ユネスコ協会理事の有永弘人(東北大名譽教授、埼玉県蓮田市)と、同協会副会長の氏家愛子

の時代が前後するが、ここで仙台放送児童合唱団(前同紹介)とともに、放送を通じて親しまれた東北放送児童合唱団の活動に触れておこう。

市が加わり、それぞれの指揮で、一週間交代で週三回(録音は週一回)の放送を行った。番組のタイトルは、当初は「よい子のうた」、三十二年十月からは「子供のうた」と変わる。しかし季節にちなんだ歌や、童謡、唱歌、世界の子供の歌などを、指揮者の解説風の話、歌唱指導を交えて取り上げるという姿勢は引き継がれた。

四十六年の第十二回発表演奏会では、チャイコフスキーの「くるみ割り人形」による合唱組曲(台本・中山知子、編曲・増本喜久子)を初めて取り上げたが、これは後のオペレッタ重視の路線へとつながっていった。五十一年五月、福井急

「東北のおもちゃ歌」(東北放送の委嘱作品)は四十年の第二十一回芸術祭合唱部門に、同ラジオ放送を通じて参加した。子供のための作品で、審査の対象外という理由で受賞は逃したものの、その音楽性を高く評価する異例の審査が付

同児童合唱団は、放送を通して、子供たちに多くのレパートリーを提供したが、四十年三月の番組終了とともに解散。その後、こども児童合唱団の名称で、伊東の指揮でテレビ出演など行ったものの、活動は長続きせず、自然消滅していった。(敬称略)

再編への努力続く
 終戦直後から、NHK仙台中央放送局(現仙台放送局)の専属として、放送を中心に活動した仙台放送合唱団。三十五年春、団員の個人契約がすべて解消された後、一般合唱団として歩き始めたことは、連載の第三回で述べた。ここではその後の活動に焦点を当ててみたい。

契約解消は、同合唱団に強い衝撃を与えた。従来の団員の大半が辞め、合唱団解散の話も持ち上がったのである。だが、存続を願う一部の若手団員によって、再編への努力が続けられた。中心的な役割を果たしたのは、当時仙台市長町中教諭で、新生合唱団の初代委員長を務めることになる内木宏治(宮城県教委指導主事、仙台市)らである。内木は、専属時代からの指揮者熊田為宏(後に山形大教授、同)と協議を重ねた上で、局側と交渉。名称の継続使用、練習会場の提供を受けること、時折放送に出演することなどを確認した。

専属時代から引き続き参加したのは、内木や、声楽家の長谷川美津子(宮城学院女子大講師、仙台市)、仙台一高教諭の平野和夫(宮城二女高教諭、同)、左沼高教諭の小野浩資(宮城

戦後の歩み

16

教育大教授、同、小野寺礼子(NHK勤務、同)らである。しかし当初の活動は、エキストラを加え、ほぼ月に一度放送に出演した程度で、細々と続いたにすぎなかった。三十八年に入ると、演奏会開催によって存在を示そうという動きが出てく

七年四月には、市民から広く団員を募集。自主公演に向けての態勢が整った。

本格的な活動開始

初めての演奏会(第一回定期演奏会)は、三十八年一月、仙台市公会堂で開かれた。指揮は熊田で、モーツァルトの「レクイエム」ほかのプログラム。オーケストラは仙台放送管弦楽団、ソリストには、二期会の栗本尊子、栗本正らを招いた。ステージに上った合唱団員

は、熊田の推薦で、平野も指揮を手掛けるようになった。第三回の定演(三十九年十一月)までは、指揮者二人制を敷いた。しかし熊田はこれを最後に手を引

盤が固まっていた。岡崎による初の演奏会となった第四回定演(四十年十一月、仙台・電力ホール)では、四十年度の芸術祭参加作品として、十月にNHKで放送した自作の「古都千体村哀情(詩・ススキヘキ)や、バルトーク、バー

も、特色ある活動の一つで、「古都千体村哀情」(宮城野の四季)のタイトルで放送を皮切りに、山内忠「ギリシヤ海岸の四季」詩・小林和夫、岡崎「幻の祭り」(詩・ススキヘキ、田中利光「青猪の歌」(詩・真壁仁)、片岡良和「鹿踊りのはじまり」(詩・江間章子)などを次々と発表した。「青猪の歌」(四十五年度)、「鹿踊り」(四十九年度)は、ともに芸術祭優秀賞を受賞している。

も、特色ある活動の一つで、「古都千体村哀情」(宮城野の四季)のタイトルで放送を皮切りに、山内忠「ギリシヤ海岸の四季」詩・小林和夫、岡崎「幻の祭り」(詩・ススキヘキ、田中利光「青猪の歌」(詩・真壁仁)、片岡良和「鹿踊りのはじまり」(詩・江間章子)などを次々と発表した。「青猪の歌」(四十五年度)、「鹿踊り」(四十九年度)は、ともに芸術祭優秀賞を受賞している。

教授、故人)演奏曲目は「パッサリのモテット」「イエスは我が喜び」(、第十回の森正「四十九年七月の第十八回定演(第三回ポップスコンサート)では、当時副指揮者だった今井邦男(尚絅学院短大助教授、仙台市)も指揮をしてい

独自のカラー

次々打ち出す

は五十五人である。

同演奏会は、大幅な赤字を出し、放送への出演料などでもなかなか補てんできなかつた。だが新しい合唱団にとっては、本格的な活動開始を意味する、重要な演奏会となった。以後、定演を中心に、活発な活動を展開することになるのである。

第一回定演の直後から

「ミサ曲口短調」(四十二年六月)や、ロマン派の作品など、意欲的なプログラムを組むようになった。四十六年一月の十三回定演では、今世紀のフランスの作曲家、モリス・デュルフレの「レクイエム」に挑んだ。

初ポップス演奏

放送による芸術祭参加

「新生」仙台放送合唱団の

続仙台放送合唱団

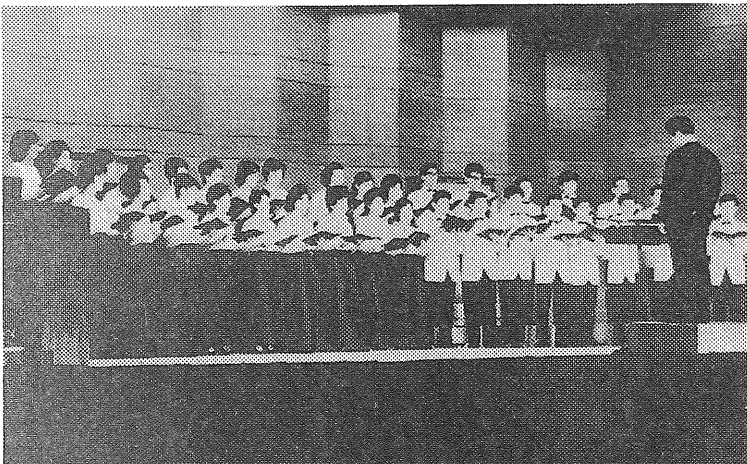
は去つてい

が、徐々

に岡崎の理想

とする団の基

は語る。三十



回定演は、同合唱団の歴史

上画期的な演奏会となつた。ミュージカル、映画音楽、フォークソング、日本語などにプログラムを絞つた、初のポップスコンサートである。団員が演奏で

「クラシックの何倍もの愛好者を抱えるポップスは、避けて通れないと考えた。ポップスと現代曲とを、何らかの形でつなぎ合わせたい」と、岡崎は振り返る。

定演でポップスを取り上げることへの批判も、一部にはあったが、市民はこのスタイルを大いに歓迎した。団員数も、このコンサートの後倍増、百人を超えた。以後、ポップスコンサートは、同合唱団の売り物となつていく。五十二年七月の二十回定演では、問宮の「合唱のためのコンボジション」の第五番から第七番までを、まとめて取り上げるなど、現代曲とポップスを活動の柱とするという独自の姿勢を、ますます強めていったのである。(敬称略)

研究会として発足

昭和四十一年十一月、東北学院大講師の岡井晃(青山学院大教授、伊勢原市)、川端純四郎(東北学院大助教授、仙台市)、尚綱女学院短大講師の佐藤泰平(立教女学院短大教授、東京・板橋区)の三人の呼び掛けで、仙台宗教音楽研究会が結成された。

「仙台はキリスト教の伝統があり、音楽活動も盛んなのに、宗教音楽を専門に研究する団体はなかった。パッパのオルガン曲、カンタータの全曲演奏を目標に掲げた」(川端)。東北学院大礼拝堂を拠点に、オルガンとカンタータの会と名付けた演奏会がスタートした。

当初、合唱は東北大学混声合唱団や、東北学院大学ヒムンコールが担当したが、間もなく研究会専属の合唱団を求める声が高まる。四十二年五月、市民を対象に団員を募集、約十五人がこれに応じた。後に仙台宗教音楽合唱団として独立する混声合唱団は、こうして誕生したのである。合唱団は同年十月、パッパの「カンタータ第三十八番」で演奏活動を開始する。しかしカンタータや、ドイツ語で歌うことはもとより、合唱も初めてというメンバーが多く、同研究会の高度な要求に、こたえ切れなかった。翌四十二年春には、研究会側から解散の話を持ち上がる。だがメンバーの存続への熱意は強く、佐藤を指揮者とする独立した団体として、歩みを進めていく。

戦後の歩み

17

再び存続の危機を迎えるが、指揮を東北混声合唱団出身の岸野佑次(東北大助教授、多賀城市)に依頼、オルガンとカンタータの会への出演を中心とした活動を続けた。四十五年八月には佐藤が帰国、以後独自の路線を打ち出すようになっていく。

新しい試みに挑むのが伝統

外部に向けて始動
翌四十六年は、同合唱団が外部に向けての活動を開始した年である。十月、全

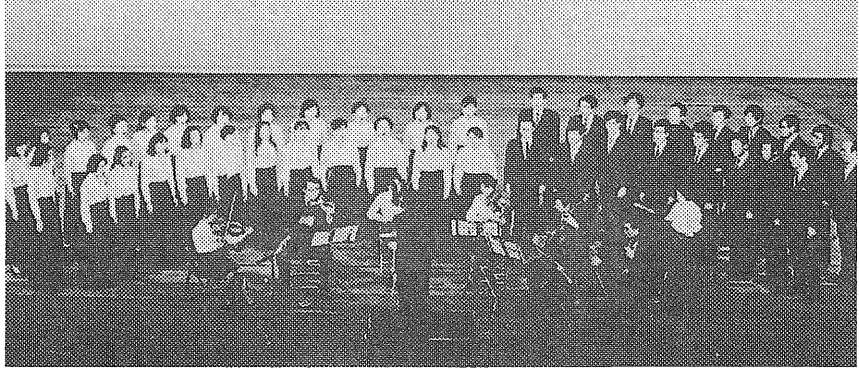
日本合唱コンクール東北大会に出場(銀賞、十二月には初めてのミニコンサート「ヤマハ仙台大ホール」を開いた。合唱経験のある新団員も次々と加入、メンバーは約五十人に達した。翌四十七年七月には、初の演奏旅行(石巻本町教会)を実施。四十八年一月には第一回演奏会(宮城県医師

会館)開催にこぎつけ、パッパの「マタイ受難曲」第一部を仙台初演(仙台市民会館)。翌年三月には全曲演奏(電力ホール)を達成する。この間、四十九年五月には、東京女子大クワイヤの「マタイ受難曲」演奏会(指揮・池宮英才、東京文化会館に賛助出演。全曲演奏会には、同クワイヤ有志も応援に駆け付けた。同演奏会のオーケストラは臨時編成の仙台宗教音楽合奏団。独唱

ころだった。当初はメンバーにクリスチャンが多かったが、合唱が好きだというだけの理由で入ってくる団員も増えた。これに対し、古くからの団員の中には、信仰を理解するため、教会へ通うべきだと主張する者もいた。しかし、議論を通じて信仰は強制しないが、宗教音楽を演奏する姿勢は崩さないという方向が確立されていった。

仙台宗教音楽合唱団

左藤は八月、米国に留学、合唱団は



▽仙台宗教音楽研究会の創立メンバーは三人のほか、小笠原政敏(東北学院大教授、仙台市)、小野浩資(宮城教育大教授、同)、国領知(現鈴木、宮城学院女子大教授、同)、長谷川美津子、高橋とみえ(宮城学院女子大講師、同)ら。四十八年まで毎月一回、以後年に四、五回のペースで演奏会を開催。ほぼ十年かけて、岡井によるパッパのオルガン全曲演奏も実現させられた。五十四年からは、会場を仙台北教会や尚綱女学院講堂に移し、活動を続けていく。佐藤泰平は五十五年東京へ移り、五十六年い

「一山越えたら、さらに険しい山があった。また無理だ」という意見もあったが、登り始めた勢いは止まらなかった。当時の委員長八重樫捷朗(東北学院高教諭、仙台市)は団員の意気込みを語る。演奏曲をすべて暗譜するなど、徹底した準備を重ねてリリングを迎え、厳しい要求に食いついていった。これがきっかけで、リリングに招かれ、五十二年四月、初の西ドイツ演奏旅行が実現する。シュツットガルト、は、宮城教高大の松原茂助教、(後に教授、故人)の紹介で、パッパの解説者として世界的な評価を固めつつあったハルム。ある。(敬称略)

(敬称略)

昭和三十年代後半になると、家庭生活にゆとりが生まれ、一般主婦の文化活動への関心が高まってきた。仙台でのママさんコーラスの萌芽(はぐり)が見られるのもこのころである。四十年代には数多くのグループが誕生。音楽的な高みを追求するもの、純粋に楽しむための団体など、個性ある活動を展開、音楽のすそ野を広げていった。

家庭電気製品の普及で、時間的にもゆとりが持てるようになった。何かに打ち込みたいという気持ちを抑えられなくなった。竹中は参加の背景をこう語る。

「三十年代も半ばになると、子供に食べさせることへの心配がなくなったし、

都市、米国・リバサイド市を訪れている。

年には八十人に迫った。初めて大ホールを使用した同年七月の第五回演奏会(電力ホール)は、一つの節目となった。今井が高田三郎「心の四季」やブラームス「愛の歌」を指揮、宮城教育大教授の福井文彦(故人)が客演し自作自演するといふ、まとまったプログラムを組んだ。これに先駆け四十六、四十七年に、福島県おかせさん合唱祭に参加。ここで宮城県おかせさん合唱連盟の必要性を痛感した今井と鹿又は、早

井死去の後、五十一年十一月からは、海録義美が理事を務め、堀釜市が行い、福井大泉勉(宮城教育大教授、仙台市)が引き継いだ。当初演奏活動は全く行わなかったが宮城県おかせさん合唱祭には初めから参加した。

石見普三男宝来商事社長、身は、四十一年に発足した青森市)が指揮者に就任した。石見は間もなく青森に返るが、七年間にわたって仙台に通い、同合唱団のレベルを向上させた。

「叙情的な片岡作品を歌いこなせる大人の合唱団が目標だった」小野という目標は、四十八年十二月、NEC主催の「コンサートと映画音楽の夕べ」(電力ホール)で、初の大きな舞台を踏んだ。

世代的音楽夜話

戦後の歩み

18

現代音楽にも挑む

日立女声コーラスの母体は、昭和三十六年六月、仙台市の日立ファミリーセンターに開設されたコーラス教室である。カルチャー教室のはしり、初め参加者集めに手間取ったが、竹中英子、村上恭子(仙台市)ら、同市片平小でPTA活動の一環として、コーラスを楽しんでいたグループが参加、スタートした。指導者は野地せつ子(現丸山、常盤木学園高講師、同)、仙台放送管弦楽団指揮者の熊田為宏(同)、作曲家の海録義美(同)が当初顧問を務めた。

して歩み始める。初舞台は同年九月、仙台市教委主催の野外音楽祭(市役所前広場)に日立奥様コーラスとして出演した。

三十九年十一月、指揮者に東北大講師の板橋健(宮城教育大助教 授、仙台市)が就任、大きな転機を迎え

民の中に溶け込んでいった。五十二年六月の第四回演奏会(仙台市民会館)は、作曲家の中田喜直を迎え、全曲中田作品を演奏。翌年十月の第五回演奏会(電力ホール)では、本間雅夫(宮城教育大教授、仙台市)の「三つのわらべうた」で現代音楽にも挑んだ。五十二年八月には、市民交流団の一員として、仙台市の姉妹

「懐かしい歌を楽しんで歌う団体」から、本格的な合唱団に向けて歩み始めたのは四十四年秋、三島学園女子短大講師の今井邦男(尚絅女学院短大助教、仙台市)を指揮者に招いてから。団員も急増、四十八

速他の団体への動き掛けを開始した。同連盟は四十八年二月、福井を理事長に発足している。五十年十月、仙台のママさんコーラスのトップを切っ、全日本合唱コンクール東北大会に出場したのも特色。五十二年六月からは、弘前相互銀行(現みちのく銀行)取締役仙台支店長の

身は、四十二年に発足した東北音楽学校ママコーラス。同校(鈴木英子校長)は引き継ぎ片岡、佐々木が行った。

「叙情的な片岡作品を歌いこなせる大人の合唱団が目標だった」小野という目標は、四十八年十二月、NEC主催の「コンサートと映画音楽の夕べ」(電力ホール)で、初の大きな舞台を踏んだ。

個性ある活動

すそ野を広げる

ママさんコーラス

急増、四十八



が、(カワイシ)シレー

(敬称略)

◇ 40年代続々誕生

昭和四十年代の特徴の一つとして、高校生、大学生ら若者を主体としたオーケストラが、相次いで活動を始めたことが挙げられる。

三十年代末に誕生したアンサンブル・センブリーチェや、新たに生まれた仙台ユース・シンフォニー・オーケストラが、市民を対象に積極的な演奏活動を展開。性格はやや異なるが、仙台室内楽団のように、プロ化を意識しながら、まとまりの良い演奏を聴かせる団体も登場した。こうした動きは、その後のアマチュアオーケストラ活動の基盤形成に向けて、大きな役割を果たすとともに、音楽家を志す若者も生み出すなど、ゆつくりと波紋を広げていくのである。ここでは二回にわたって、若者たちの活動に焦点を当ててみる。

三十年代後半、仙台市内でも、クラブ活動で弦楽合奏に取り組み中学校が見られるようになった。昭和三十九年四月、その草分けである五橋中の弦楽クラブと、吹奏楽部のOBが、卒業を機に結成したのが、五橋OBオーケストラである。初めは日曜に中学の音楽室を借りて、アンサンブル

ルを染しむ程度だったが、徐々に同校・OB以外の参加者も増加。四十二年十月、アンサンブル・センブリーチェと改称、同市の大谷幼稚園に会場を移し、本格的な練習を開始した。

△ 19 ▽

谷幼稚園を使っていた藤井サト子バレエ研究所の発表会(日乃出会館七階ホール)でバレエコンサートの小品を演奏、対外的な活動をスタートさせた。同年十二月には、東北学院大講師の岡井晃(青山学院大教授、伊勢原市)の指揮で、第一回演奏会(ヤマハ仙台店六階ホール)を開いている。

◇ 楽しむことから

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

高い技術求め

意欲的に練習

「団員の意欲はさまざまだったが、これを生かして、速いテンポで体質改善するには、新しい作品に取り組む必要がある。」

「音の出し方から、しかし、このころから、メンバーが集めにくくなり「体質を改善し、弦楽合奏」

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「団員の意欲はさまざまだったが、これを生かして、速いテンポで体質改善するには、新しい作品に取り組む必要がある。」

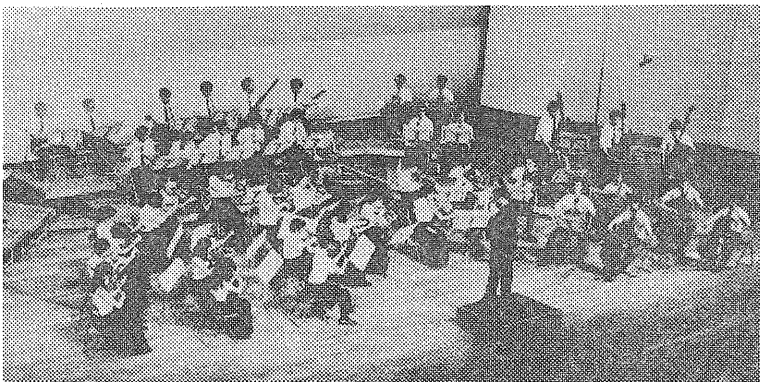
「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「団員の意欲はさまざまだったが、これを生かして、速いテンポで体質改善するには、新しい作品に取り組む必要がある。」

若者の音楽活動

中央楽団の吉田雅夫(フルート)、瀬戸瑠子(バイオリン)

アンサンブル・センブリーチェの第5回演奏会、指揮は岡崎光治(46年7月、宮城県民会館)



アンサンブル・センブリーチェの第5回演奏会、指揮は岡崎光治(46年7月、宮城県民会館)

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

「初めは毎年演奏会を開くつもりはなく、火は消さないぐらいの考えだった。回を重ねるにつれ、楽しむことから、さらに一歩高度な段階を目指そうという意欲が出てきた。庄司は振り返る。

◇計算できない魅力

仙台ユース・シンフォニー・オーケストラの第一回定期演奏会は、昭和四十五年八月、宮城県民会館で開かれた。ハイドン「交響曲第九十五番」、バッハ「管弦楽組曲第二番」ほかの選曲である。

「若者たちのすさまじいまでのパワーを、音楽の中に取り入れたいと思った。良い意味でも、悪い意味でも、計算できない魅力があった」。初代常任指揮者の岡崎光治(作曲家、仙台市在住)は語る。

多くの団員をステージに上げるため、ハイドンにトロンボーンを加えるといった措置もとった。若者たちは、岡崎の期待通り、全エネルギーを演奏会にぶつけていった。

高校生主体のオーケストラは受験、学校の行事などに追われ定期的に練習を行うのは困難だった。春先からまとまった練習を始め、夏の演奏会終了後は、全体の活動は休止するといった状態が、しばらく続いた。しかし演奏会に備え、宮城県利府町のキャンプ場や、同町子町の国鉄保養所で行った台宿では、徹夜も含め懸命に練習。岡崎の指導の下、着実に成長し、大曲にも取

り組めるようになっていったのである。ユースでの活動がきっかけで音楽大学を志望したり、大学のオーケストラに所属する者も生まれる。メンバーの一部は、高校卒業後も引き続き参加するようになった。

20

戦後の歩み

が就任。岡崎は客演指揮者として定演に登場、指導に当たるとなる。年間を通しての本格的な活動が始まったのもこの年である。翌五十年一月のニューイヤークンサートが、そのスタートを飾る演奏会となった。同年八月には第六回定演(宮城県民会館)直後に、同じプログラム(ベートーベン「英雄」ほか)での山形公演(山形県民会館)を経て、初のクリスマスコンサート(宮城学院講堂)を開

多くの優れた演奏家を輩出

「当時はジュニアオーケストラは東北になかった。気負いもあったが、自分の存在をアピールするだけなく、こうした活動の起爆剤になればと考えていた」と桑村。自信と意欲が、大きな形となって表れた演奏会だった。

五十二年からは、OBで当時山形大生だった高嶋弘春、中心になったのは、バ

「真に音楽好きで、室内楽をやりたいという人たちが周りにいたことが、結成を決意した原因。若くて恐れを知らないところもあったが、将来はプロのアンサンブルとしての活動を考えていた」。寺師は当時の意気込みをこう語る。

「響楽団でコンサートマスターを務めた内海達孝(宇都宮大助教授、宇都宮市、石川善美(東北大助手、仙台市)や、センブリーチェのコンサートマスター庄司博(ダックシティ丸光勤務、仙台市)、桐朋学園大生の勅使河原美知子(現庄司、尚

高校合唱部も参加
四十九年は活動上の大きな転換期となった。常任指揮者に音楽器トレーナーとして参加していた桑村幹男(フルート奏者、仙台市)

の寺師隆子
・オーケストラの第二回定期演奏会から。指揮は岡崎光治(昭和46年8月、宮城県民会館)

の師師隆子
・オーケストラの第二回定期演奏会から。指揮は岡崎光治(昭和46年8月、宮城県民会館)

若者の音楽活動

(現佐々木、米田ニユージヤージー州) 県民会館



仙台ユース・シンフォニーのメンバーが演奏している様子。

◇団員の留学相次ぐ

同年九月には、仙台市の農業共済会館四階ホールで、第一回定期演奏会を開催した。指揮は熊田。エキストラを含め、二十三人がステージに上がり、バッハ「ブランデンブルク協奏曲

熊田の推薦で山形大助教授の前田幸市郎(指揮者、鎌倉市)が指揮者に就任。このころからメンバーは大幅に入れ替わり、山形大、桐朋学園大の音楽専攻の学生が中心になった。仙台以外のメンバーが増え、練習を行うにも制約があったが、以後定演に加え、仙台労音(後に仙台音楽鑑賞協会)主催の演奏会に度々出演する

な活動を行っていく。コントラバスの田中洪至(東京・杉並区)や、チェロの雨田光弘(三鷹市)、厳本真理(東京)が重奏団メンバーだった。この生沼誠司(東京・中野区)ら、東京

メモ

仙台ユース・シンフォニーの第一回クリスマスコンサート(電力ホール)には、市内九つの高校の合唱部、百十七人が出演した。以後もコンサートに百人以上が参加している。岡崎は五十六年の第十二回定演(同)に客演し

躍中の演奏家を団友として迎えていたのも特色。またバロック・古典だけでなく、近現代物も積極的に取り上げた。五十一年三月の第六回定演(電力ホール)でウオルトンの「弦楽オーケストラのためのソナタ」を本邦初演したのをはじめ、バルトーク「ディベルティメント」、スーク「弦楽セレナード」などもプログラムに載せている。

だが、強い指導力を発揮するようになっていた寺師は五十二年から、ミュンヘンに留学。翌五十三年三月に帰国して、第八回定演(電力ホール)を開いたものの、その後中心メンバーの留学が相次ぐ。結局、この定演を最後に消滅してしまっただけでなく、同合奏団は、仙台を基盤に活動する多くの演奏家を輩出する

たのを最後に、手を引く。この間五十四、五十五年には、熊田が音楽監督を務めた。五十七年の第十三回定演からは、常任指揮者に作曲家の石川浩(仙台)が就任。その後新田孝(尚美学園短大講師、東京・豊島区)に引き継がれる。

(敬称略)

復興へ力強い響き

震災の傷跡も生々しい昭和二十一年十月十二日、仙台市の市役所前広場で、本格的な吹奏楽の演奏会が開かれた。指揮は作曲家の左藤長助(後に仙台放送管弦楽団指揮者、故人)。旧陸軍軍楽隊出身の若手奏者十八人が、ヒュー「カルメン」からの抜粋や、左藤の序曲「蘇る民族」など八曲を演奏した。市民にとって戦後初めてまとまった音楽に接する機会であり、千人を超える聴衆が広場を埋め尽くした。力強い響きは、人々の復興への意欲をかき立てた。

佐藤を中心とするこの楽団は、仙台吹奏楽団と名乗り、将来はプロとしての活動を目指したが、結局この演奏会だけで消滅してしまふ。しかし戦後の吹奏楽活動のスタートを告げる、象徴的な演奏会となったのである。

二十年代前半の動きとして注目されるのは、仙台鉄道管理局吹奏楽団などの職場団体が、戦前からの活動を再開したことだ。昭和七年、声立清治(皇店経営、仙台市)を中心に、青年団の吹奏楽団として発足した立町音楽隊も、焼け残った

わずかの楽器を手に再建され、小学校の運動会などで活動を始めた。

二十年代後半に入ると、宮城吹奏楽団、仙台市警察音楽隊(後の宮城県警音楽隊)、陸上自衛隊第六音楽隊(後の東北方面音楽隊)な

世に伝へ音楽の響き 戦後の歩み

浸透していった。

30年に合同演奏会

こうして昭和三十年には初の吹奏楽団の合同演奏会が開催され、宮城県吹奏楽連盟結成の動きも出てくる。四十年代に入ると、学校での吹奏楽の普及を背景とした、新たな市民団体も生まれるようになった。ここでは二十年代後半以降誕生した市民団体と、同連盟を中心に、吹奏楽の歩みを追ってみたい。

「せっかくながら量の優れた人がいるのに、生かす場がないのは惜しい。市民に質の高い吹奏楽に接してほしい」と思ったというのが、青木の狙いだった。

青木が経営する長町の広瀬座を拠点に練習を開始。映画館での演奏会や、市中パレード、祭りへの出演などで親しまれた。だが後に

学校教育とも

結び付き浸透

宮城吹奏楽団の創立は、二十六年九月。結成を呼び掛けたのは映画館、芝居小屋を経営していた青木精一(仙台商工会議所参与、仙台市)で、旧陸、海軍軍楽隊出身者、仙鉄吹奏楽団

団員ら約四十人が参加した。指揮者は海軍出身の長谷峰治(故人)、陸軍出身で、仙台放送管弦楽団に所属

していた清水嘉市(同)、仙鉄吹奏楽団長の佐藤勝三郎(仙台市)の三人が務めた。

「せっかくながら量の優れた人がいるのに、生かす場がないのは惜しい。市民に質の高い吹奏楽に接してほしい」と思ったというのが、青木の狙いだった。

吹奏楽の系譜

立町音楽隊、陸上自衛隊第六音楽隊、宮城県警音楽隊

創設間もないころの仙台吹奏楽団(当時は仙台バンドサークル)昭和45年9月、宮城県民会館で開かれた吹奏楽コンクール宮城県大会

退団者が相次ぎ、三十一年には自然消滅してしまう。最後の活躍の舞台となったのが、三十年十月、仙台市公会堂で開かれた第一回宮城県吹奏楽団合同演奏会(河北新報社主催)だった。

この演奏会は、吹奏楽の歩みの上で、一つの節目ともなった。出演はほかに、

退団者が相次ぎ、三十一年には自然消滅してしまう。最後の活躍の舞台となったのが、三十年十月、仙台市公会堂で開かれた第一回宮城県吹奏楽団合同演奏会(河北新報社主催)だった。

この演奏会は、吹奏楽の歩みの上で、一つの節目ともなった。出演はほかに、

この演奏会は、吹奏楽の歩みの上で、一つの節目ともなった。出演はほかに、

この演奏会は、吹奏楽の歩みの上で、一つの節目ともなった。出演はほかに、

メモ

▽宮城県警察音楽隊は昭和二十六年一月、佐藤長助を指揮者に仙台市警察音楽隊として発足。同三月、市中行進の後、仙台市公会堂で記念演奏会を開き、活動を開始した。二十九年、県警音楽隊として改組。五十五年以降、市民を対象に定期

市民バンドも誕生

こうして吹奏楽の基盤整備を背景に、四十三年十二

演奏会を行う▽陸上自衛隊東北方面音楽隊は、三十五年一月の創立。前身は二十九年十月発足の第六音楽隊である。三十九年八月、東北各地の音楽隊と第一回定期合同演奏会(電力ホール)を開催。以後毎年継続することとなり、五十二年からは青少年のためのコンサート

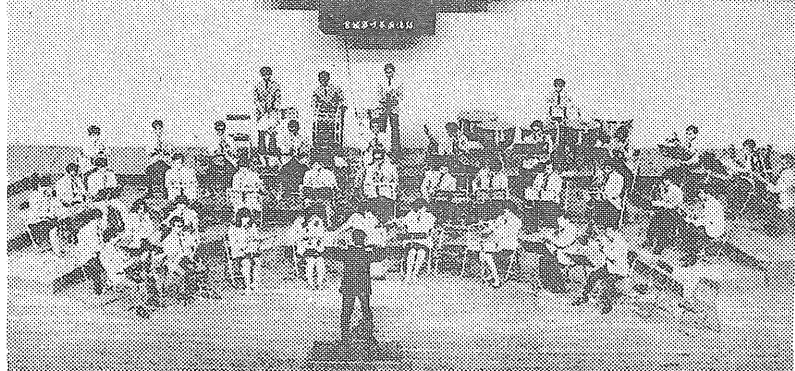
仙台市の全面的な支援を得て、同店六階ホールを拠点に活動を開始した。宮城吹奏楽団が消滅して十二年後

結成翌年からは吹奏楽コンクール東北大会に出場。四十六年五月、第一回定期演奏会(宮城県民会館)を開いた。以後定演、コンクールを柱に、養護施設への慰問演奏会、各種コンサート出演と、積極的な活動を続けていく。四十九年から

SBCC仙台吹奏楽団、五十年秋には仙台吹奏楽団と改称。このころ一時的に団員数が激減し、危機に陥ったが、よく持ち直した。

五十年代に入ると、新しい市民団体が相次いで誕生するが、仙台吹奏楽団出身者が結成の中心となるものも出てくる。同吹奏楽団は、新しい時代の市民バンドの先駆けとして、重要な役割を果たしていった。

た。ヤマハ



仙台吹奏楽団の演奏風景。演奏会を行う▽陸上自衛隊東北方面音楽隊は、三十五年一月の創立。前身は二十九年十月発足の第六音楽隊である。三十九年八月、東北各地の音楽隊と第一回定期合同演奏会(電力ホール)を開催。以後毎年継続することとなり、五十二年からは青少年のためのコンサート

(敬称略)

◇ 声楽界に強い影響

これまで主に演奏団体へ焦点を当ててきたが、今回からは二度にわたって、個人の演奏活動に注目してみる。終戦後しばらくは、地元の演奏家が自主的な活動を行えるような社会情勢になく、その内容も制限された。やがて市民による合唱、オーケストラ活動が芽生え、育つにつれて、ソリストとしての活動の場が生まれてくる。戦前、戦中の活動を再開したり、新たに活動のスタートを切った演奏家たちは、幾つかの団体が熱意を傾けたヘンデルの「メサイア」や、ベートーベンの「第九」公演などのソリストとして、演奏活動を支えていったのである。困難な状況の中、リサイタルに取り組み演奏家も徐々に増えていった。

終戦直後から目立った活動を行ったのは、声楽の武田敏子(仙台市)、石川百合(現山崎)、元大阪キリスト(現千田、宮城学院女子大教授、仙台市)らである。やや遅れて渋谷伝(元宮城教育大教授、同)も活動を始めた。

東京音楽学校(東京芸術大)を卒業後、戦時中から仙台を中心に、広く慰問演奏などを行っていた武田

△22▽

戦後の歩み

(ソプラノ)は、終戦後は一時、仙台放送合唱団でも活躍した。二十二年、北日本合唱団(NJCS)の「メサイア」などを皮切りに、東北大学交響楽団によるモーツァルトの「レクイエム」(二十六年)ベルティの「椿姫」(抜粋(二十七年)、二度

演奏では、門下生が前座を務めた。二十七年、第十七回音楽コンクールに入賞したのを記念し、翌二十八年五月、仙台市公会堂で本格的なリサイタルを開催。以後一段と活動を活性化させ、声楽界に強い影響を及ぼしていく。

◇ ピアノは30年以降

石川(アルト)、菊地(ソプラノ)は二十四年から始まった市内合唱団の合同「メサイア」演奏会初期の不動の独唱者である。石川はNJCSの「メサイア」

の活動が目立ったが、東北大学交響楽団のモーツァルトの「レクイエム」や合同メサイアにも登場した。二十年代、「メサイア」、「第九」などのソリストとして活躍したのは、ほかに仙台放送合唱団の丸芳多恵子(元金沢女子大助教授、金沢市)、斎藤克子(ピアノ教師、横浜市)、東北大教授松平正寿(町田市)、仙台放送管弦楽団の現岡和蔵(現・幹博、バイオリン教師、仙台市)、東北学院教官の赤城泰(遺愛学院院長、函館市)、同リチャード・ラマー

の活動が目立ったが、東北大学交響楽団とチャイコフスキの「ピアノ協奏曲第一番」で共演(仙台市公会堂)、以後白石、盛岡市への演奏旅行でも同曲を演奏した。瀬戸堯子(宮城学院女子大講師、仙台市)も三十年、三十六年に自主的なリサイタルを開催、三十九年には仙台交響楽団とグリグのピアノ協奏曲で共演している。

早過ぎた2人の死
ところで二十年代から三十年代初めにかけての音楽界を語る上で、忘れることができない、二人の天逝(うせつ)した演奏家がいる。元東北大助教授の藤田尚明と、ピアノリストの佐藤良子である。

昭和二十二年十月、宮城学院音楽科の研究科が再開。二十四年以降、同修了者による演奏会が、宮城学院講堂で開かれた。二十年代に登場しているのは、声楽の菊地よみ、山田つや(後に赤岡、元宮城学院女子大教授、仙台市)も二十年代から三十年にかけて

授、故人)、ピアノの瀬戸堯子、相馬勢子(故人)、北目ノブ子(仙台市)、菊地明子ほかである。相馬は二十八年、北目は三十年に仙台市民交響楽団と共演している。フルートの宮城徳雄(フ菊地よみ、山田つや)も二十年代から三十年にかけて

演奏団体育育ち 環境にも変化

などにも、武田とともに出演した。菊地のソロでの活動開始は仙台ボランテアコワイヤによる、戦後仙台初の「メサイア」演奏会(二十一年十一月)である。三十年以降、自主的なリサイタルも開くようになる。

渋谷(バリトン)は仙台放送合唱団との共演が多く、放送や演奏旅行などで

十年代初めにかけての音楽界を語る上で、忘れることができない、二人の天逝(うせつ)した演奏家がいる。元東北大助教授の藤田尚明と、ピアノリストの佐藤良子である。

戦後初の自主的なリサイタルとなった武田敏子リサイタルから、左から三人目が

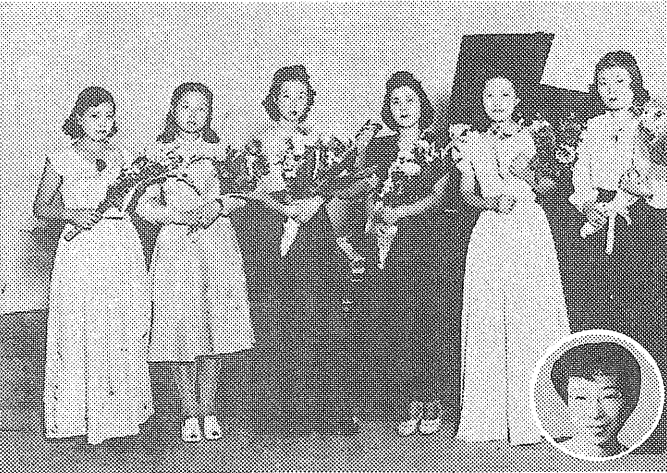
藤田は専攻は物理学だ

二人をよく知る瀬戸は「ともに、真に天才的な音楽家として強く思い出に残っている」と才能を惜しむ。二人の早過ぎる死は、仙台の音楽界にとっても痛恨の出来事だった。(敬称略)

ソリストの活躍

① 子大教授、仙台市)が三十二年以降、活

昭和30年当時



佐藤良子は宮城学院女子大在学中の二十七年十一月、仙台市民交響楽団と、ベートーベンの「ピアノ協奏曲第三番」で共演。翌二十八年には東北大学交響楽団に招かれ、グリグの協奏曲を演奏した。このとき指揮をしたのは藤田である。大学中退後二十九年、音楽コンクールに入選して本格的な演奏活動に入り、三十年五月、仙台市公会堂でリサイタルを開いた。取り上げたのはショパンの「バラード」全曲、ベートーベン、フォーレ、ドビュッシーなど。後援会も生まれ、将来を大いに期待されたが、三十一年二月、鉄道事故のため帰らぬ人となった。二十三歳だった。

29年から活動開始

昭和三十年代後半から四十年代になると、特色ある活動を行う演奏家が次々と現れ、音楽界に彩りを添えるようになる。リサイタルも年を追うごとに増え、さまざまな刺激をもたらした。

早くから目立った活動を行ったのは音楽家たちである。昭和二十九年、合同「サイア」の独唱者としてソロの活動を開始したソプラノの佐藤ミエ(当時西内、宮城学院女子大講師、仙台市)は、三十五年六月、第一回リサイタルを開催(宮城学院講堂)。以後一段と活動を活性化させる。佐藤は第一回からフォーレ、ドビュッシーなどフランス歌曲を積極的に取り上げた。

「当時はモデルもなく、楽譜も入手しにくかったが、フランス物には、それまで知らなかった新鮮な魅力があった。つかれたように夢中で取り組んだ」という佐藤の活動は、仙台でのフランス歌曲演奏の路線を築いていく。四十九年にはドビュッシーだけのリサイタルを開催。メシアン作品なども取り上げた。五十年代に入ってから、日本文曲の演奏にも力を入れ、邦人の新しい歌曲集をまとめた形で次々と紹介した。

戦後の歩み

23

三十年代後半から、度々ジョイントリサイタルを開いていた板橋健(宮城教育大助教授、仙台市)は、パリソンでデビュー(後にテノールに転向)。四十一年二月の第一回リサイタル(電力ホール)以降、ドイツ・リートを中心に独自の演奏活動を展開する。四十

「子」子どもの不思議な角笛。全曲演奏も実現させていた。また日本歌曲にも取り組んでいく。

ソプラノの長谷川美津子(宮城学院女子大講師、仙台市)、姉齒けい子(同、同)の活動も重要である。長谷川は声域が広がったことから、三十八年の合同「サイア」のアルトでデビュー。翌三十九年九月の第一回リサイタル(宮城学院講堂)以降、ドイツ・リートを柱に、善美な演奏活動を行った。

音楽家活発に 次々と演奏会

姉齒も四十二年六月、第一回リサイタルを宮城県民会館で開催。日本歌曲とイタリア・オペラのアリアに焦点を絞った活動を展開する。地元作曲家の作品も、四十年代から積極的に取り上げた。パリソンの小野浩資(宮城教育大学教授、同)も、四十年代に、ドイツ・リートを中心に、三度のリサイタルを開催している。

少なかった器楽奏の演奏会はまた少なかったが、東北大、宮城教育大講師だったピアノの金井裕愛知(県立芸術大教授、名古屋)が、三十九年十月以降、リサイタル活動を開始。四十年には田村宏(東京芸術大教授)と、当時では珍しい二台のピアノのための作品だけを集めた演奏会を開いている。

米国ニューヨーク州在住)が、四十四年以降活発に演奏活動を展開。三十七年、中学時代に仙台市民交響楽団と共演するなど、期待を集めていた菊池恭江(宮城学院女子大講師、仙台市)も、四十六年、第一回リサイタルを開いた。

オルガンの岡井晃(青山学院大教授、伊勢原市)、マリンバの菊池とも子(現草刈、東京・新宿区)も、個性豊かな活動を行っている。岡井は東北学院大講師

×モ 四十年代にリサイタルを開いた在仙の演奏家はほかに声楽の布田庸子(宮城学院女子大、宮城教育大講師)、若井有子(現井上、東京音大講師、久喜市)、丸山せつ子(常盤木学園高講師、女子大、聖霊女子短大講師、

佐藤佳子(尚絅女学院高教諭)、ピアノの相沢麗子(現松田、宮城教育大講師)、矢ノ目恵子(現佐藤、多摩市)、伊達華子(山形大助教授)、板橋久美(宮城学院女子大講師)、水沢爽子(宮城学院女子大、聖霊女子短大講師、

秋田市)、バイオリンの栗野敏子(カワイ音楽教室講師)ら。東京を中心に演奏活動を始めたばかりの浅野繁(宮城学院女子大助教授)も四十九年、仙台でのデビューリサイタルを開いている。

三年には、シューベルト「冬の旅」全曲を演奏するなど、大曲を次々と取り上げた。五十年代に入ってから、シューベルトの三大歌曲集連続演奏会や、メソソプラノの今関由紀子(岩手大助教授、盛岡市)との共演で、

姉齒も四十二年六月、第一回リサイタルを宮城県民会館で開催。日本歌曲とイタリア・オペラのアリアに焦点を絞った活動を展開する。地元作曲家の作品も、四十年代から積極的に取り上げた。パリソンの小野浩資(宮城教育大学教授、同)も、四十年代に、ドイツ・リートを中心に、三度のリサイタルを開催している。

ピアノの大泉勉(宮城教育大教授、仙台市)は四十年九月に第一回リサイタルを開催(電力ホール)、声楽の伴奏でも活躍する。二

(後に教授)だった四十四年未から、バツハのオルガン全曲演奏に取り組み(仙台宗教音楽研究会主催のオルガンとカンタータの会、東北学院大礼拝堂、十年かけてほぼこれを達成した。菊池は四十七年から、ほぼ毎年リサイタルや、や

佐藤ミエ第一回リサイタル(昭和三十五年六月、宮城学院講堂)と、板橋健第一回リサイタル。ピアノは金井裕(昭和三十四年十二月、電力ホ

海外からも演奏家 海外に拠点を置きながら、毎年のように仙台でリサイタルを開いた仙台出身の演奏家が登壇したのも、四十年代の特徴として挙げられよう。ピアノの佐々木健(パリ在住、建部佳代(米国インディアナ州在住)である。佐々木は四十一年、初リサイタル開催後、渡欧。四十六年からは毎年帰国、演奏活動に加え、後進の指導にも当たった。建部もベ

ルリンに在任していた四十年代前半から、五十年代後半まで、頻りに帰国演奏会を開いた。クラリネットの海鋒正毅(東京芸術大講師、東京・世田谷区)、ソプラノの清水明子(東京・杉並区)ら東京での活動と並行し、出身地仙台でもリサイタルを行う演奏家が増えた。こうした個人の活動は、五十年代に入ると、さらに大きな展開を見せる。若い世代の演奏家が次々と仙台を基盤とした活動を始める。音楽界はますます活気づいてくるのである。(敬称略)

ソリストの活躍

バイオリンでは山形大講師の寺師隆子(現佐々木、

は山形大講師の寺師隆子(現佐々木、



◇創作再びスタート

終戦直後からNHK仙台中央放送局が放送した「東北うたの本」のために、仙

台在住の作曲家たちが、児童向けの歌を作曲したことは、既に紹介した。仙台放送児童合唱団指揮者だった

海鋒義美(仙台市)や、福井文彦(元東北大、宮城教育大教授、故人)、佐藤長助(故人)らによるこうした

仕事は、戦後の創作活動のスタートでもあった。

この時代、最も目覚ましい活動を行ったのは福井である。国立音楽学校ピアノ科の出身だが、音楽コンクール一位に入賞するなど、戦前から作曲家としても活躍していた福井は終戦後、仙台放送合唱団の専任指揮者として、故郷仙台での活動を始めた。昭和二十七年からは、東京と仙台を往復する生活が始まるが、声楽曲を中心に、次々と優れた作品を生み出す。二十九年には代表作である交声曲「蔵王に寄す(詩・真壁)」を作曲。三十一年、三十三年には混声合唱のための「空・道・河」(詩・江間章子)、混声合唱のための組曲「動物園」(詩・宮沢厚)で、芸術祭最優秀賞、文部大臣賞を受賞した。四十二年には子どものための合唱組曲「東北のおもちゃ歌」(同)が生まれた。

福井の手法は古典的とも言えるが「日本語のアクセ

ント、子音の扱い、詩的確な把握(東北大名管教授・藤井康治)に持ち味があった。

仙台市出身で、戦時中仙台放送管弦楽団の指揮者を務めた佐藤長助はラジオ放送用のオペレッタや、吹奏楽などで多くの作品を生ん

た。吹奏楽では組曲「山里」(二十五年)、「民謡による舞曲」(三十九年)、「学園序曲」(四十二年)などが次々と出版された。

佐藤の後を受けて、同管弦楽団の指揮者を務めた熊田為宏(元山形大教授、仙台市)も「東

北地方の子守

歌による幻想的変奏曲」(三十九年)や、交響詩「リア

の海」(三十九年)、「バラード」(四十四年)などの管弦

楽曲を発表している。

新たな動きで注目

昭和四十年代に入ると、作曲界に新たな動きが出てくる。まず注目されるのは、四十二年一月、東北大出身の若手作曲家岡崎光治(宮城教育大講師、仙台市、今井邦男(尚絅女学院短大助教授、同)、佐藤泰平(立教女学院短大教授、東京・板

橋区)の三人が、合同で作品展を開いたことである。

東京で活躍していた片岡良和(仙台市)も四十年、出身地仙台に活動の拠点を移した。この四人は演奏家の参加を得て仙台音楽家集団(SOS)を結成、四十七年十一月、第一回作品発表会を開く。岡崎は四十八年と五十年、片岡は五十年、今井は五十一年に個展も開催した。

佐藤の後を受けて、同管弦楽団の指揮者を務めた熊田為宏(元山形大教授、仙台市)も「東

北地方の子守

歌による幻想的変奏曲」(三十九年)や、交響詩「リアの海」(三十九年)、「バラード」(四十四年)などの管弦楽曲を発表している。

新たな動きで注目

昭和四十年代に入ると、作曲界に新たな動きが出てくる。まず注目されるのは、四十二年一月、東北大出身の若手作曲家岡崎光治(宮城教育大講師、仙台市、今井邦男(尚絅女学院短大助教授、同)、佐藤泰平(立教女学院短大教授、東京・板

橋区)の三人が、合同で作品展を開いたことである。

東京で活躍していた片岡良和(仙台市)も四十年、出身地仙台に活動の拠点を移した。この四人は演奏家の参加を得て仙台音楽家集団(SOS)を結成、四十七年十一月、第一回作品発表会を開く。岡崎は四十八年と五十年、片岡は五十年、今井は五十一年に個展も開催した。

佐藤の後を受けて、同管弦楽団の指揮者を務めた熊田為宏(元山形大教授、仙台市)も「東

北地方の子守

歌による幻想的変奏曲」(三十九年)や、交響詩「リアの海」(三十九年)、「バラード」(四十四年)などの管弦楽曲を発表している。

新たな動きで注目

昭和四十年代に入ると、作曲界に新たな動きが出てくる。まず注目されるのは、四十二年一月、東北大出身の若手作曲家岡崎光治(宮城教育大講師、仙台市、今井邦男(尚絅女学院短大助教授、同)、佐藤泰平(立教女学院短大教授、東京・板

橋区)の三人が、合同で作品展を開いたことである。

東京で活躍していた片岡良和(仙台市)も四十年、出身地仙台に活動の拠点を移した。この四人は演奏家の参加を得て仙台音楽家集団(SOS)を結成、四十七年十一月、第一回作品発表会を開く。岡崎は四十八年と五十年、片岡は五十年、今井は五十一年に個展も開催した。

佐藤の後を受けて、同管弦楽団の指揮者を務めた熊田為宏(元山形大教授、仙台市)も「東

北地方の子守

戦後の歩み

24

多彩な活動で作品生み出す

「歌う喜びを体感できる作品を書きたい」という今井は合唱曲で重要な仕事をした。この四人は演奏家の参加を得て仙台音楽家集団(SOS)を結成、四十七年十一月、第一回作品発表会を開く。岡崎は四十八年と五十年、片岡は五十年、今井は五十一年に個展も開催した。

佐藤の後を受けて、同管弦楽団の指揮者を務めた熊田為宏(元山形大教授、仙台市)も「東北のおもちゃ歌」(同)が生まれた。福井の手法は古典的とも言えるが「日本語のアクセ

ント、子音の扱い、詩的確な把握(東北大名管教授・藤井康治)に持ち味があった。仙台市出身で、戦時中仙台放送管弦楽団の指揮者を務めた佐藤長助はラジオ放送用のオペレッタや、吹奏楽などで多くの作品を生んだ。吹奏楽では組曲「山里」(二十五年)、「民謡による舞曲」(三十九年)、「学園序曲」(四十二年)などが次々と出版された。

佐藤の後を受けて、同管弦楽団の指揮者を務めた熊田為宏(元山形大教授、仙台市)も「東北のおもちゃ歌」(同)が生まれた。福井の手法は古典的とも言えるが「日本語のアクセ

北地方の子守

作曲家の群像

作曲家の群像

△福井の「蔵王に寄す」は、そのわずか六日前に急逝した佐藤長助の吹奏楽作品はほかに遺作となつた舞踊組曲「南蛮遣使」など。支倉常長の欧州派遣をテーマとした三部構成の作品で、第一部は五十三年十月、佐藤が育てた宮城県警察音楽隊と、警視庁音楽隊によって初演された(仙台市、ピアノの大泉勉(同)ら。

△福井の「蔵王に寄す」は、そのわずか六日前に急逝した佐藤長助の吹奏楽作品はほかに遺作となつた舞踊組曲「南蛮遣使」など。支倉常長の欧州派遣をテーマとした三部構成の作品で、第一部は五十三年十月、佐藤が育てた宮城県警察音楽隊と、警視庁音楽隊によって初演された(仙台市、ピアノの大泉勉(同)ら。



音楽家集団に参加した演奏家は、バイオリンの寺師隆子(現佐々木、米国・ニュージャージー州)、マリリンバの菊池とも子(現草刈、東京・新宿区)、バリトンの小野浩資(宮城教育大教授、仙台市)、ピアノの大泉勉(同)ら。

◇ 団員約30人で発足

仙台交響楽団が昭和四十年代前半で、実質的な活動を停止した後、本格的なオーケストラを求める声があちこちで聞かれるようになった。東北大学交響楽団が着実な演奏活動を行い、また若者たちによるオーケストラ結成の動きも見られるようになったものの、世代を超えた市民オーケストラの活動に関しては、空白の時期が続いた。こうした状況の改善を目指す音楽家たちによって、四十八年三月に創立されたのが、宮城フィルハーモニー管弦楽団である。アマチュア、プロの混合メンバーでスタートした同オーケストラは、市民の期待する中、仙台では初のプロ・オーケストラに発展、音楽文化の中核を担うようになっていくのである。

結成の中心となったのは作曲家の片岡良和(仙台市)、仙台放送管弦楽団の川村文夫(バイオリン教室主宰)、同、堀江昭(同)、同や、常盤木学園高教諭の菊池有恒(仙台ミュージズ音楽院院長)、仙台交響楽団のコンサートマスターを務めた山路厚雄(東北大勤務、同)ら。片岡、菊池の二人を指揮者に、団員約三十人でスタートした。片岡は四十年、東京から

仙台に活動の場を移して以来、作曲家の立場からも、常設のオーケストラの必要性を痛感。札幌交響楽団を視察するなど、設立の可能性を探っていた。「仙台」作品を書いても、音にできない。これではいづまでも中央追従から抜け

仙台交響楽団

戦後の歩み

25

かし「地域の文化を担える仙台市」を迎え、活動は一段と活発化する。十月には、念願の第一回定期演奏会が実現。この時は片岡の指揮でベートーベン「運命」など、菊池の指揮、仙台出身の大場郁子(現今井、国立音楽大講師、武蔵野市)のソロで、モリツアルト「ピアノ協奏曲第二十三番」を

「初めは長く続かせるためにはどうすればいいのかわかりかたが、宮城から五十万円の助成を受け、名取市内の小、中学校九校で移動音楽教室を開催している。同音楽教室

定期、移動音楽教室に加え、初のポツプスコンサート(七月、気仙沼市での公演(十一月)と、活動の幅を著実に広げていったのである。

困難乗り越え自立
アマチュア・オーケストラがプロに移行するのには、多くの困難が付きまとう。完全自立のプロを目指すべく、宮内省(現文化庁)に申請し、十月にはコンサートマスターに東京フィルハーモニー交響楽団の

山路厚雄氏が参加、浜田徳昭の指揮で、ベルディー「クワイエム」(四十五年)、パッハ「ミサ曲短調」(四十六年)などを演奏していた。仙台フィルハーモニーの初期の定期演奏会に登場した指揮者は、後に理事・団長も務める熊

田為宏(元山形大教授、仙台市)、岡本仁(東京・渋谷区)、作曲家の服部公一(東京・港区)など。福村の時代には、山岡重信(日本大学教授、八王子市)が首席客演指揮者として三度登場している。

初めてのプロ オーケストラ

「初めは長く続かせるためにはどうすればいいのかわかりかたが、宮城から五十万円の助成を受け、名取市内の小、中学校九校で移動音楽教室を開催している。同音楽教室

定期、移動音楽教室に加え、初のポツプスコンサート(七月、気仙沼市での公演(十一月)と、活動の幅を著実に広げていったのである。

困難乗り越え自立
アマチュア・オーケストラがプロに移行するのには、多くの困難が付きまとう。完全自立のプロを目指すべく、宮内省(現文化庁)に申請し、十月にはコンサートマスターに東京フィルハーモニー交響楽団の

山路厚雄氏が参加、浜田徳昭の指揮で、ベルディー「クワイエム」(四十五年)、パッハ「ミサ曲短調」(四十六年)などを演奏していた。仙台フィルハーモニーの初期の定期演奏会に登場した指揮者は、後に理事・団長も務める熊

田為宏(元山形大教授、仙台市)、岡本仁(東京・渋谷区)、作曲家の服部公一(東京・港区)など。福村の時代には、山岡重信(日本大学教授、八王子市)が首席客演指揮者として三度登場している。

田為宏(元山形大教授、仙台市)、岡本仁(東京・渋谷区)、作曲家の服部公一(東京・港区)など。福村の時代には、山岡重信(日本大学教授、八王子市)が首席客演指揮者として三度登場している。

出せないし、東北の拠点都市にきちんとしたオーケストラがないのでは恥ずかしいと思つた(片岡)。仙台交響楽団も結局は財政的な破たんから消滅した。オーケストラの運営

活動一段と活発に
四十九年に入ると、事務局長に佐藤伍郎(鹿又社長、ケストラの運営母体となる

宮城フィルハーモニー協会
(藤崎三郎助)が発足。10月、宮城県民会館

プロ志向で固まり、第一歩を踏み出したのは、五十二年六月、宮城フィルハーモニー協会の社団法人認可によってである。

翌五十四年は、プロ化への大規模な改革が行われた。四月、山形交響楽団にいたトランプットの八木良弘(後に事務局長、八木音楽事務所社長、仙台市、フ

山形交響楽団からもさらに四人が移籍、団員の交代が進んだ。この時からプロとしての本格的な活動が始まる。五十六年春には二瓶、八嶋、渋谷のコンサートマスター三人体制が整った。

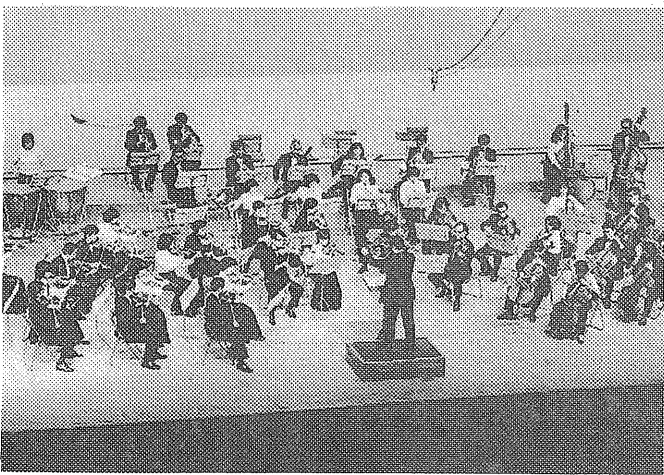
福村は五十五年六月の第十三回定期から、五十七年十月の第二十一回定期まで、連続九回指揮台上に上り、徹底した訓練に当たった。エキストラを東京から呼ぶことも力を注いだ。こうした姿勢は累積赤字を一筆に増大させるなど、オーケストラの抱える問題を顕在化させ、協会側との対立も招く。だが演奏水準は急速に向上していったのである。

宮城フィルハーモニー管弦楽団
会長が発足

宮城フィルハーモニー管弦楽団の第一回定期演奏会から、指揮は片岡、昭和49年

宮城フィルハーモニー管弦楽団の第一回定期演奏会から、指揮は片岡、昭和49年

宮城フィルハーモニー管弦楽団の第一回定期演奏会から、指揮は片岡、昭和49年



福村が退いた後、五十八年四月からは、音楽総監督に作曲家の芥川也寸志(故人)、常在指揮者に初山和明(東京・大田区)が就任、より充実したプロ・オーケストラを目指して、さまざまな課題に取り組んでいくのだ。(敬称略)

◆記念碑的な出来事

総合芸術であるオペラの上演には、芸術的な基盤の整備に加え、膨大な労力と経費が必要だ。地方での上演には殊更多くの難題がつかまそう。仙台では昭和三十年、仙台労音の旗揚げ公演で、市民有志による制作委員会が服部正の「手古奈」を上演するという記念碑的な出来事があった。また三十年代初め、仙台アメリカ文化センター(ACC)を母体としたACC歌劇団が、重要な活動を行っていた。しかしわずかの期間にすぎず、市民による自主的な活動は、途絶えた状態が続いた。五十年代に入り、仙台オペラ協会の登場で、やっと本格的な歩みが始めるのである。今回はオペラの歴史を追ってみる。

「手古奈」は三十年八月、仙台市公会堂で上演された。企画の中心になったのは、フリーの音楽講師大沼正明(故人)や、仙台一高教諭の平野和夫(宮城二女高教諭、名取市、宮城県庁合唱団指揮者で、劇研水曜会のメンバーでもあった石田信二(由利正人、仙台市立病院技師長、仙台市)ら。大沼が指揮、石田が演出を受け持ち、平野やオーディションで主役に選ばれた松田直子(宮城県経済連、同)らが出演した。合唱は仙台合唱団有志、演奏は東北

大学交響楽団、仙台放送管弦楽団メンバーらによる、約十人のアンサンブルが担当した。「全くオペラの下地がなく怖かったが、やってみてという気持ちの方が強かった。試行錯誤の中から、少しずつ形を作り上げていった。石田は振り返る。

文化センターでもオペラ上演に向けての動きが出ていた。二十九年十月、東北学院大の専任音楽講師として赴任したヒクトー・セアル(日本大学講師、東京・渋谷区)によって、ACC合唱団、管弦楽団が編成されたのである。

26

話音楽の世紀

戦後の歩み

◆優秀な団員が続々

団員はともに公募。合唱団のオーディションには八十人を選ぶのに三百人が応募するほどだった。セアルは米国・オクラホマ大学で

第一回のオペラ公演(宮城労働会館)を実現させた。この時初めてACC歌劇団を名乗っている。演目は三文オペラ。一七二八年、イギリスで初演された時のジョン・ゲイの脚本、当時の流行音楽、民謡などを取り、セアルがオリジナルに近い形で再現したものである。日本語訳、指揮、演出もすべてセアルが自ら手掛けた。

昭和三十年に

手作りの公演

オペラへの挑戦

オペラを専攻、仙台でのオペラ上演を夢見ていた。当初は自信はなかったが、優秀な団員が入り、これならできると確信したと語る。六月には初の定期演奏会を合唱団、オーケストラ合

大崎健二(泉館山高教諭、同)、左藤栄衛(聖ウルスラ学院小教諭、同)らも参加した。「オペラを研究してみよう」と始めたので、演奏会形式でもやればいと思っていた「小野が、発足直後、同年の宮城県芸術祭音楽会出演の話が舞い込む。

「手古奈」上演少し前の三十年二月、仙台アメリカ

オペラへの挑戦

市を指揮者に、市民有志によって再建されたが、長

◆協会発足で本格化

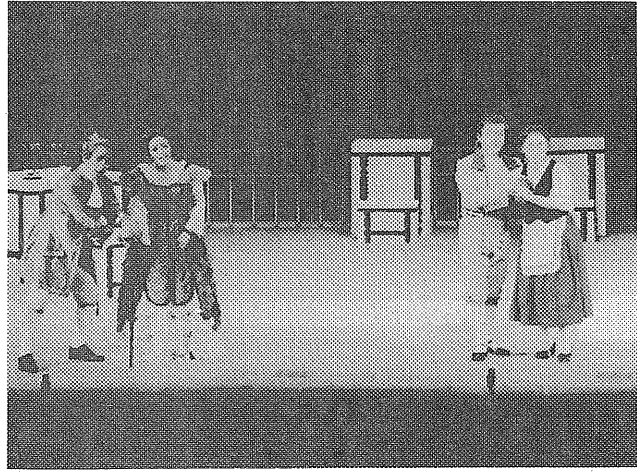
仙台オペラ協会が、仙台オペラ研究会としてスタートを切ったのは五十一年四月。ACC歌劇団の活動から二十年の後である。宮城教育大助教授の小野浩資(現教授、仙台市)を代表

メモ

「手古奈」を一部改作したのが「真間の手古奈」である。既に紹介したように昭和三十三年十一月、ローレン・シュタット・コールによって上演されたヴァメリカ文化センターは、日米間の文化、情報の交流促進

のため、米国政府が全国各地に設置した。仙台アメリカ文化センターは、二十七年(前身は二十三年、斎藤報恩会館内に設立され、四十六年に廃止された。ACC合唱団、管弦楽団は、定演のほか、白石、古川、岩沼などへの演奏旅行、米軍

キャンプでの演奏会、ラジオ出演なども行った。定演ではオペラの aria や、ピアノ協奏曲なども演奏。菊地ふみ(現千田、宮城学院女子大教授、仙台市)、菊地明子(同大教授、同)らが共演している。



以後宮フィルとの毎年秋の本格公演が定着。五十四年には江戸末期の東北の一漁村が舞台である林谷英治「海の子守歌」を上演するなど、次第に特色を強めていく。同年十月、仙台オペラ協会と改称。五十七年のブッチーニ「修道女アンジュエリカ」、マスカニ「カバレリア・ルスティカーナ」では小野が初めて演出も手掛けた。以後経済面での課題に苦しみながらも、さまざまなオペラを市民に紹介、存在を強くアピールしていくのである。(敬称略)

独自の道歩き出す

終戦後間もない昭和二十三年から、若々しいハーモニイで、市民に存在を強くアピールしたグリーン・ウッド・ハーモニイが四十六年、二つに分裂したことは、連載の第四回で述べた。こ

こでは、二団体のその後の動きを追ってみる。また比較的早い時期から個性的な活動を展開した合唱団にだま

と、仙台合唱団の歩みも併せて紹介しよう。

グリーン・ウッド・ハーモニイから伊達忠敏(元中学校教諭、仙台市)、合野善夫(多賀城中教頭、多賀城市)らを中心とする約二十人が離れ、仙台グリーン・ウッド・ハーモニイ混声合唱団を結成したのは四十六年三月。同六月、新合唱団誕生を公表した。一方グリーン・ウッド・ハーモニイは同五月、常任の中野貞治(現石坂、種苗店経営、長岡市)の指揮で、第十八回定期演奏会(宮城県民会館)を開

催。それぞれ独自の道を歩き出したのである。

永陽一郎を招き、オルフの「カトリック・カルミナ」に挑戦するなど、一段と活気づいた。中野は四十九年春、仙台を去ったが、同年一月から常任指揮者を引き継いでいた今井邦男によって、新たな時代が築かれていくのである。

27

戦後の歩み

者として各地で活躍していた弘前相互銀行仙台支店長の石見晋二男(玉来商事社長、青森市)を招き、田中利光の「四季」を演奏した。こうした積極的な姿勢が実り同年秋には、合唱コンクール全国大会への出場を果たす。結成直後の昭和二十四年以來、二十七年ぶりの快挙だった。以後コンクールでの活躍が目立つようになる。五十三年六月の定演では、関屋晋の指揮で、ミヨイ、ブランクのフランス物にも挑んだ。

ハーマニー混声合唱団は、今野善夫を常任指揮者に、活動を開始した。演奏する側も聴衆も、背伸びすることなく楽しめる演奏会の開催が、同合唱団の基本的な目標だった。

「初めは練習会場もなかった。だが自分たちから飛び出した以上は、価値ある活動をしなくてはと必死だった」伊達は振り返る。四十七年四月、宮城県医師会館でファミリーコンサートを開いて足場を固めた。

「初めは練習会場もなかった。だが自分たちから飛び出した以上は、価値ある活動をしなくてはと必死だった」伊達は振り返る。四十七年四月、宮城県医師会館でファミリーコンサートを開いて足場を固めた。

「初めは練習会場もなかった。だが自分たちから飛び出した以上は、価値ある活動をしなくてはと必死だった」伊達は振り返る。四十七年四月、宮城県医師会館でファミリーコンサートを開いて足場を固めた。

「初めは練習会場もなかった。だが自分たちから飛び出した以上は、価値ある活動をしなくてはと必死だった」伊達は振り返る。四十七年四月、宮城県医師会館でファミリーコンサートを開いて足場を固めた。

演奏会を柱に 特色を強める

今井は五十三年夏から一年間、英国に留学。帰国後はポリフォニーに加え、ヨーロッパの現代作品も活発に取り上げ、独自のカラーを作っていく。またシンフォニック・コーラス路線も目指していくのである。

以後定演を柱に活動を展開。五十二年五月の定演(仙台市民会館)では、グリーン・ウッド・ハーモニイの育ての親である福井文彦(元東北大、宮城教育大教授、故人)の作品演奏会を開催。翌年は再び大中を招くなど、特色ある活動を続

けた。五十四年十一月には、熊田為宏(元山形大教授、仙台市)の指揮、宮城フィルハーモニー管弦楽団との共演で「ソレルヌサイア」(抜粋)に挑戦。五十六年十月の定演では、しばしば伴奏者を務めていた遠藤安彦(宮城学院女子大助教授、仙台市)の指揮で、遠藤の「コラール集「花天の詩」」を演奏した。

合唱団にだまは三十四年十月、宇角元亨(東北大高速力学研究所勤務、仙台市、菊地重保(宮城県保険

課勤務、同)ら仙台工OBと、山登りの仲間七人で発足した。初代指揮者は菊地。練習会場の幼稚園の講堂での発表会を重ねた後、四十年二月「親はく団体から一歩踏み出して、本格的な合唱に取り組み」(宇角)ため、原田小夜子(仙台女子商教諭、同)を指揮者に迎えた。同年十一月、市民

曲「化石」(詩・長谷川博、委嘱作品)を演奏した▽高平つぐゆきは五十二年一月、作品発表会も開いた。出演は仙台合唱団や、チェロの井上頼豊、尺八の宮田耕八朗ほか。歌曲、合唱曲、室内楽曲などを発表した。

「基本的なアンサンブルの力を付けることが当面の課題だった」という今井は、五十二年からルネサンス・ポリフォニーに積極的に取り組む。同年六月の定演(電力ホール)は、合唱指揮

「基本的なアンサンブルの力を付けることが当面の課題だった」という今井は、五十二年からルネサンス・ポリフォニーに積極的に取り組む。同年六月の定演(電力ホール)は、合唱指揮

「基本的なアンサンブルの力を付けることが当面の課題だった」という今井は、五十二年からルネサンス・ポリフォニーに積極的に取り組む。同年六月の定演(電力ホール)は、合唱指揮

「基本的なアンサンブルの力を付けることが当面の課題だった」という今井は、五十二年からルネサンス・ポリフォニーに積極的に取り組む。同年六月の定演(電力ホール)は、合唱指揮

「基本的なアンサンブルの力を付けることが当面の課題だった」という今井は、五十二年からルネサンス・ポリフォニーに積極的に取り組む。同年六月の定演(電力ホール)は、合唱指揮

「基本的なアンサンブルの力を付けることが当面の課題だった」という今井は、五十二年からルネサンス・ポリフォニーに積極的に取り組む。同年六月の定演(電力ホール)は、合唱指揮

「基本的なアンサンブルの力を付けることが当面の課題だった」という今井は、五十二年からルネサンス・ポリフォニーに積極的に取り組む。同年六月の定演(電力ホール)は、合唱指揮

合唱活動余聞

開催。翌年は再び大中を招くなど、特色ある活動を続

グリーン・ウッド・ハーモニイの第25回定期演奏会から。指揮は今井邦男、昭和52年6月、電力ホール



た谷宏(アパート経営、仙台市)、斎藤龍一郎(同市)らを中心とした合唱グループ。二十六年、大衆が主人公になる音楽運動を展開しようという闘いの呼び掛けに応じ、仙台合唱団として新たなスタートを切った。二十九年四月からは、合唱に興味のある者を集めて指導する研究生制度を導入。この年、高平つぐゆき(NTT勤務、同)ら約二十人が参加した。集会などがあれば、アコーディオンを抱えて出掛け、ロシア民謡や日本の歌、労働歌などを歌うという活動が続く。二十八年から始まった、みやぎのうたごた祭典なども重要な役割を果たすようになってきた。

(敬称略)

46年に初めて発足

戦後の音楽の歩みを語る時、地味ではあっても、個性豊かな活動で、音楽界に彩りを添えてきた団体の存在も見落とせない。今回は仙台で初めて誕生した古楽器アンサンブル、ルネサンス・コンサートと、地道に息の長い活動を目指した、あまーびれ合奏団に注目してみる。またマンドリン音楽の普及に貢献した仙台マンドリンクラブ、チルコロ・マンドリニスティコ・フローラの動向も追ってみよう。

世に伝わる音楽の歩み

戦後の歩み

28

地道な活動で

彩りを添える

授、東京・狛江市)の指導を受けるようになった。「リコーダーで始めたころは、本格的に取り組むことになるとは思わなかった。古楽器による演奏に接する都度、新鮮な驚きがあり、とりこになってしまった」と木村は語る。

クホルム在任)ら有力メンバーが加わっている。コンサートの特色の一つは、大橋をはじめバロック・オーボエの本間正史(東京都響首席奏者、桐朋学園大講師)、リコーダーの花岡和生(桐朋学園大講師、山岡重治(上野学園大講師)ら第一線の演奏家を招いたことだ。中世ヨーロッパ音楽から、ルネサンス、バロック音楽など、幅広く紹介した。しかしメンバーの留

第一回演奏会を開催(ヤマハホール六階ホール)し、ヘンデルの合奏協奏曲などを演奏。翌年からは仙台音楽研究会のオルガンとカンタータの会にも度々出演するようになった。四十八年からはトレーナ一兼初の指揮者としてカワイ音楽教室講師の北島智仁(バイオリン教室主宰、秋田市)を迎え態勢を強化、一度本格的な演奏会を開いた。しかしメンバーの留

五十一、ルネサンス・コンサートと改称。同年十月から木村の経営する名曲喫茶「無伴奏」や宮城県医師会館を会場に、月一回程度のコンサート活動を始めた。このころ

五十一、ルネサンス・コンサートと改称。同年十月から木村の経営する名曲喫茶「無伴奏」や宮城県医師会館を会場に、月一回程度のコンサート活動を始めた。このころ

五十一、ルネサンス・コンサートと改称。同年十月から木村の経営する名曲喫茶「無伴奏」や宮城県医師会館を会場に、月一回程度のコンサート活動を始めた。このころ

個性競う合奏団

年二月、演奏会開催にこぎつけた。以後カホール

を開催。オリジナル曲や、マンドリン合奏により演奏効果の上る曲を編曲し、取り上げた。指揮者は三十三年から来山晴夫(仙台ホテル役員、仙台市)、さらに稲垣へと引き継がれ、活動の幅を広げる。

四十年代には合唱団との共演なども活発に行うようになる。また四十年秋、団員によって東北大学マンドリン楽部が創立されるなど、マンドリン音楽普及の核になった。

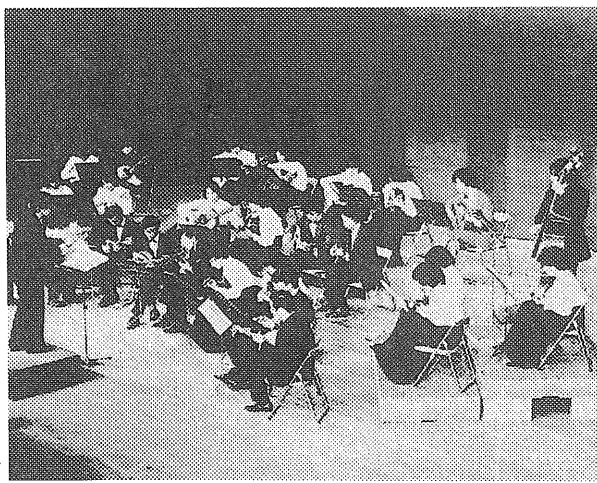
「マンドリンはポピュラリティが高まった。四十二年十月、高橋が師事していた田中常彦(後に日本マンドリン連盟初代会長、故人)を指揮、指導に

「マンドリンはポピュラリティが高まった。四十二年十月、高橋が師事していた田中常彦(後に日本マンドリン連盟初代会長、故人)を指揮、指導に

「マンドリンはポピュラリティが高まった。四十二年十月、高橋が師事していた田中常彦(後に日本マンドリン連盟初代会長、故人)を指揮、指導に

「マンドリンはポピュラリティが高まった。四十二年十月、高橋が師事していた田中常彦(後に日本マンドリン連盟初代会長、故人)を指揮、指導に

「マンドリンはポピュラリティが高まった。四十二年十月、高橋が師事していた田中常彦(後に日本マンドリン連盟初代会長、故人)を指揮、指導に



五十二年からは、作曲家の柳田隆介(宮城県立盲学校教諭、仙台市)も指揮者として登場。以後柳田らに仙の作曲家の作品も取り上げるなど、一段と特色を強めていく。(敬称略)

戦後の復興期彩る

演奏会の舞台となるホールに移り変わりも、音楽活動の歩みと切り離せない。戦災で焼け野原となった仙台で、戦火を免れたホールは、宮城学院の大講堂、東北大学中央講堂などわずかに残った。戦後の音楽文化は、こうした会場で少しずつ芽生え、成長していったのである。昭和二十五年になると、仙台市公会堂の出現で様相は一変。ここを拠点に地元の演奏家、団体の活動が活発化、同時に世界のトップクラスの演奏家たちも頻りに訪れ、刺激を与えるようになった。さらに三十年代後半になると、近代的な設備を誇るホールが次々と生まれ、会場の特色を生かした演奏会が開かれるようになるのである。ホールの変遷を仙台を訪れた演奏家なども紹介しながらとってみる。

昭和十二年落成の宮城学院大講堂(収容人員九百五十)は、終戦直後、唯一の音楽会ホールだった。戦前からレオニード・クロイツァー(ピアノ)らの演奏会が開かれたが、戦後も二十二年になると、活発に利用されるようになる。クロイツァー、井口基成(ピアノ)ら、地元でも仙台放送

台唱団、仙台ボランティアワイヤなどが同年演奏会を開いた。二十三年には巖本真理、諏訪根自子(バイオリン)、近衛秀麿指揮の日本ピクチャー交響楽団などが登場した。同交響楽団は、戦後仙台を訪れた初めてのオーケストラで、市民の熱狂

で、東北大学交響楽団によるベートーベン「第九」東北初演に加え、近衛秀麿指揮の東宝交響楽団、巖本真理、園田高弘(ピアノ)らの演奏会が相次いで開かれた。

とも歩み、発展した団体も生まれた。初の本格的な演奏会は二十八年二月の日本交響楽団(現NHK交響楽団)公演。同年ユディ・メニューイン(バイオリン)らも登場した。初期に訪れた主な外来演奏家を紹介すると二十七年がゲルハルト・ヒツシユ(バリトン)、アルフレッド・コルトー(ピアノ)、二十八年がヨーゼフ・シゲティ、アイザック・スターン

ルが演奏会を開いた。地元の音楽界の発展のためにも果たした役割も計り知れない。仙台市民交響楽団創立当時の団員で、後に指揮者も務めた宮城徳雄(フルート教師、仙台市)

ルが、同十一月、東北大学川内記念講堂がオープン、三十九年八月には、宮城県民会館が誕生したことで、仙台のホール事情は大きく変わる。電力ホールは固定席千二百六、補助席百七十四(後に固定席千七百七十二)で、画期的なビルの中のホールとして開館。当時としては一級の音響効果を誇り、独奏や室内楽などの演奏会で強みを発揮した。使用料は高かったものの、四十年ごろからは、地元の演奏家にも利用されるようになる。

メロ ヲ東北大学中 央講堂は、明治四十三年、旧仙台高等工業学校の講堂として建設、後に同大工学部講堂となった。昭和十八年や南西に移すとともに二百十坪に増築。戦後大学講堂として使われた。昭和二十一年からハヤシタ(三三年後に閉鎖)が小規模な演奏会に利用されるようになった。宮城学院大講堂は、五十五年、同学院が市の中心部から北部の桜ヶ丘に移転したのに伴い、取り壊された。

レジャーセンター、宮城労働会館(旧仙台劇場)、日乃出会館など。四十年からはヤマハ仙台店、河合楽器仙台ショッパのホールが、五十一年からはヤマハ花壇センター(三三年後に閉鎖)が小規模な演奏会に利用されるようになった。宮城学院大講堂は、五十五年、同学院が市の中心部から北部の桜ヶ丘に移転したのに伴い、取り壊された。

戦後の歩み

戦後を支えた 仙台市公会堂

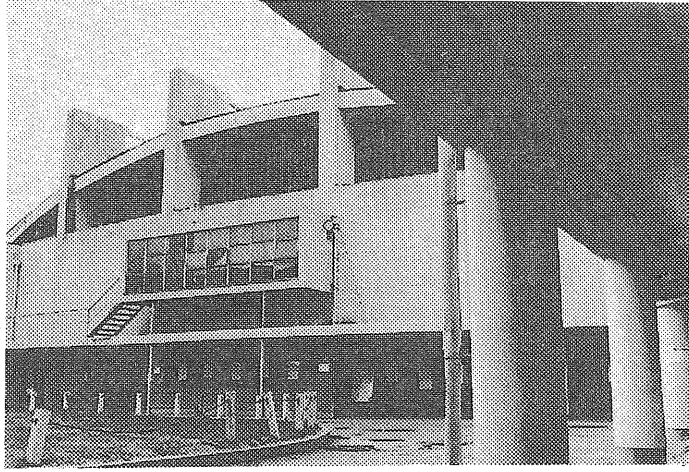
一角に建てられた同公会堂は、つり屋根方式、階段状にスロープをつけた客席構造など、当時としては画期的な施設で、ホールは千五百人を収容できた。当時全国的に会場不足で、海外の一流奏者が来日すればは訪れるという状況が続く。また仙台市民交響楽団のように、公会堂と

一角に建てられた同公会堂は、つり屋根方式、階段状にスロープをつけた客席構造など、当時としては画期的な施設で、ホールは千五百人を収容できた。当時全国的に会場不足で、海外の一流奏者が来日すればは訪れるという状況が続く。また仙台市民交響楽団のように、公会堂と

一角に建てられた同公会堂は、つり屋根方式、階段状にスロープをつけた客席構造など、当時としては画期的な施設で、ホールは千五百人を収容できた。当時全国的に会場不足で、海外の一流奏者が来日すればは訪れるという状況が続く。また仙台市民交響楽団のように、公会堂と

演奏会場の変遷

一ニのNBC 交響楽団、三十二年にはベリン・フィ



川内記念講堂は、収容人員千九百五十六。東北大学二席(後に千六百五席)、以後仙台でのオーケストラの演奏会の主会場となる。しかし大ホール一つで、地元の演奏家が利用しにくいという問題も浮上してくる。四十八年十一月、取り壊された仙台市公会堂の跡地に仙台市民会館が開館した。千三百十席の大ホールに加え、五百席の小ホールを設けたのは、地元の演奏活動に利用しやすくする狙いがあった。五十六年四月オープンの仙台市戦災復興記念館(三百席)も地元で活用できる規模を考慮したホールである。同ホールは徐々に、地元の演奏家のリサイタルなどに利用されるようになった。だがこうしたホールの建設を上回る勢いで、演奏活動は増え続けているのである。(敬称略)

作曲家、重要な役割

焼け跡の中で芽生えた音楽活動が、さまざまに形を変えながら発展する様子を紹介してきた連載も、今回が最終回となる。ここでは五十年代に入ってからの特徴的な動き、新たに生まれた団体などに注目してみよう。

この時代を特徴付けるものとして、第一に挙げておきたいのは、作曲家たちの動きである。五十一年九月、本間雅夫(宮城教育大教授、仙台市)、宮城純一(聖和学園短大講師、同)によって結成された音楽の現代と伝統の会(OGD)は、同年十月、第一回演奏会(ヤマハ花壇ミュージックセンター)を開催。以後「若い世代の作曲展」(五十二、五十三、五十四、五十六年)など、テーマを設定した演奏会を続け、在仙の作曲家の作品や、欧米の現代音楽などを次々と紹介した。初期には小野浩資(宮城教育大教授、同)大泉勉(同、岡崎光治(宮城教育大、山形大講師、同)後にOGD会員)らが企画協力という形で参加した。

OGDの活動は、演奏機会の少なかつた現代音楽、とりわけ地元での創作活動を市民に近付けたほか、現代音楽に取り組む演奏家を育成する意味でも、重要な役割を果たす。

戦後の歩み

30 完

日本作曲家協議会(JFC)加盟の片岡良和(仙台市)、安達弘潮(弘前大教授、弘前市)、伊藤俊幸(酒田市)の三人が中心となつて、五十四年から始めた「東北の

作曲家」シリーズも、現代音楽の作品発表の一つの流れをつくった。同年十月の演奏会(仙台市民会館)では、参加者が宮フィルを指揮して自作曲を発表。五十七年から東北在住の作曲家が広く参加、JFC東北の創立に結び付いていく。

作曲家「シリーズも、現代音楽の作品発表の一つの流れをつくった。同年十月の演奏会(仙台市民会館)では、参加者が宮フィルを指揮して自作曲を発表。五十七年から東北在住の作曲家が広く参加、JFC東北の創立に結び付いていく。

演奏家のグループも次々と誕生した。子供たちに生

将来見据えた

意欲的な活動

の演奏を聴かせることを目的に、五十三年三月発足したコンパニオン・ドゥ・ミュージクの創立メンバーは、アノの大泉勉、声楽の板橋健(宮城教育大助教授、同)、佐藤ミエ(宮城学院女子大講師、仙台市)、バイオリンの菊池恭江(同、同)ら。唯一、日本歌曲の幅広い紹介に取り組んだ。OGD主催の「20世紀の音楽展II」から「昭和55年3月、仙台市民会館小ホール

主催するグループの登場も、地元演奏家の活動の場を大きく広げていった。や時代はさかのぼるが、四十七年六月、東現(四国自動車競技会会長、高松市)、横山修司(東北電力勤務、仙台市)、藤井康治(東北大名誉教授、同)熊田為宏(元山形大教授、同)らによって結成された仙台モーター協会は、例年に巖本真理(西重奏団など中央から演

中心となつて五十六年から始めた土曜サロンコンサート(会場・ヤマハ仙台店六階ホール、年六回)も、地元の演奏家の出演を得たユニークな試みだ。夜の演奏会に足を運びにくい主婦や、子供たちにも演奏を聴いてもらうことを狙った。

オケ再編も活発

オーケストラ再編の動きも挙げておく。プロ化した宮城フィルを離れた山路厚雄(東北大学学部長勤務、仙台市)、川村文夫(バイオリ

昭和五十年代に入ると、

若い世代の演奏家のリサイタルが活発に行われるようになる。前半だけでもピアノの庄司みどり(宮城教育大講師、渋谷区)、宮城学院女子大講師、渋谷るり子(尚絨女学院短大講師)、平間百合子、赤城真理(宮城学院女子大講師)、ハーブの鶴巻啓子(現・沢田、フリスの作品を紹介する。



月には、荒井富雄(仙台山高教諭、同)、菊池の指揮で、オープニングコンサート(中新田パッパホール)を開いた。五十八年からは、仙台市での年一回の定期演奏会を開催。市民によるアマチュアオーケストラの中心的な存在となる。一方、宮城フィルの成長もあって、五十四年十二月からは、宮城フィルと市民有志の合唱による、ペーターペン「第九」演奏会が開かれるようになった。

敬称略

彩り増す音楽界

さまざまな形で音楽会を